



Chapter 1

あゝ、リング切断……セグロカモメ複合体

I. はじめに

セグロカモメの分類と分布の「ミニ野鳥教室」(2001/11)で、リング・スピーシーズ [Ring Species=環状種] という考え方をご紹介しました。これはシベリアに起源を持つセグロカモメが北極点を取り巻くように広く分布していて、繁殖地域の違いにより背面の羽色、足の色、大きさ等が少しずつ変化していますが、起源の場所から東回りに移ったもの(漸進的、連続的に変化して行き背面は羽色は淡く、足の色はピンク、体は大きくなる)と西回りに移ったもの(背面は濃く、足は黄色く、体は小さく変化する)が、西の端 [イギリス/西ヨーロッパ付近] で出会った [分布が重複した] 時にはもはや交雑しない [繁殖隔離] ほど違いが大きく [別種と] なっているというものです。これら北方系のセグロカモメ (argentatus/argenteus) から南方に派生した亜種や分布拡張の途中で分化して別種となったものもあります。

II. DNA調査

ところが、最近のDNA調査 [対象は21タクサ<種および亜種>] によると、リング・スピーシーズの考え方とは異なることが判明したとのこと。その要旨は、セグロカモメの拡散が始まったのは<A>北大西洋地域、アラル・カスピ海地域の2ヶ所の氷期逃避地域 [つまり、従来考えられていた単系祖先ではなく、2系統の祖先] からです。

<A>北大西洋地域を起源とするものは、大西洋から地中海、ヨーロッパ沿岸に拡散して分化したと考えられる下記の(亜)種:

- ①大西洋セグロカモメ (仮称) (atlantis)
- ②地中海セグロカモメ (仮称) (michahellis)
- ③アルメニアセグロカモメ (armenicus)
- ④(ヨーロッパ)セグロカモメ (argentatus/argenteus)
- ⑤オオカモメ (marinus)

アラル・カスピ海地域を起源とするものは、北及び西さらに東へ拡散して分化したと考えられる下記の(亜)種:

- ①ニシセグロカモメ (fuscus/intermedius/graellsii)
- ②ホイグリンカモメ (heuglini/taimyrensis)
- ③セグロカモメ (vegae/birulai)

- ④モウコセグロカモメ (mongolicus)
- ⑤バラバセグロカモメ (仮称) (barabensis)
- ⑥カスピセグロカモメ (仮称) (cachinnans)
- ⑦アメリカセグロカモメ (smithsonianus)
- ⑧オオセグロカモメ (schistisagus)
- ⑨アイスランドカモメ (glaucoides)
- ⑩カナダカモメ (thayeri)
- ⑪ワシカモメ (glaucescens)
- ⑫シロカモメ (hyperboreus)

III. 現状と今後

上記のようにDNA調査からは、イギリス/西ヨーロッパからシベリアを経由し北極を取り巻くように分布しているのは地域のグループのみで、到達地は北米大陸の東側までです。“リング”を完成する為には欠かせない北米からヨーロッパへのセグロカモメの侵入の証拠はないとのこと。しかし現状、ニシセグロカモメ (graellsii) が北米大陸に侵入しコロニーをつくらうとしており、もしこれが北米の smithsonianus と交雑せず共存するとなると、逆方向への“リング”が完成することになります。

最後に、この調査の結果判明した興味深い点を少し挙げますと、

- ①北米大陸の smithsonianus は、リング・スピーシーズの考え方では最西方に到達した西ヨーロッパの argentatus/argenteus と近縁と考えられていましたが、起源を異にする別の系統で、シベリアのグループ (vegae 等) と同じ祖先から生じたものであることが判明したことです。これではリングを形成しないこととなります (リングを形成するには祖先が同じ [同系統] であることが必要です)。
- ②カスピセグロカモメ (cachinnans) は地中海セグロカモメ (michahellis) や大西洋セグロカモメ (atlantis) とは別の系統と判明しました。以前は同系統と考えられ、いずれもキアシセグロカモメという種名で呼ばれていました。
- ③セグロカモメ複合体には含まれず別種とされているヨーロッパのオオカモメ (marinus)、オオセグロカモメ、ワシカモメ、アイスランドカモメがセグロカモメやホイグリンカモメ等と同じ起源であることが判明したこと。
- ④モウコセグロカモメ (mongolicus) が、従来近縁と考えられていたキアシセグロカモメではなくオオセグロカモメと同系統と判明したこと。
- ⑤バラバセグロカモメ (barabensis) [カザフスタン北部のバラバ草原の狭い地域に分布] が、直ぐ南部のキアシセグロカモメと同系統とされていたのが、遙か北方のホイグリンカモメと遺伝子的に区別出来ない [つまり同起源] ことが判明した事等々。

今回は横文字が多く出てきて読みづらいと思いますが、分類が不安定で和名も統一されていないテーマですのでご辛抱のほどを。以前の「ミニ野鳥教室」の誌上改訂版としてお読みください。尚、『むくどり通信』No.155('01/

9)、No.160('02/7)、No.170('04/3)に関連の拙稿が掲載されています。興味のある方は参照ください。

いずれにせよ、カモメ類の分類と分布は面白いテーマです。
(塩田 猛 2006/07/17記)

例★会★報★告

2006.7.1～2006.8.27

一般・平日探鳥会、自然観察会

◎金剛山探鳥会

〈7/15〉梅雨の晴れ間の好天に恵まれ、山頂をめざして出発。ゆっくりとしたペースで適宜休憩をとり、鳥たちの鳴き声を聞きながら千早本道を登った。山頂遊歩道では、サンコウチョウやコジュケイの鳴き真似をするキビタキの後ろ姿を観察。参加者一同、思わず感嘆の声。全体的には、木々の葉が茂って、鳥の姿をなかなか確認することができなかったものの、美しい『さえずり』を十分に楽しむことができた。山上は猛暑の下界より随分涼しく、快適な探鳥会であった。

◎ジュニア探鳥会・第12回 箕面公園

〈7/29〉箕面駅周辺はツバメのコロニー、あちこちで巣があり子育てしているので、親が餌をヒナに運ぶ時間を計った。2分で戻ってくる場合、3分以上かかる場合などあったが、親の働きがよくわかった。どんな餌かわからない場合が多いのだが、イトトンボ（モノサシトンボ？）を持ってきたときは、食欲旺盛なヒナもなかなか飲み込めずにいた。鳥の種数・個体数とも少なかったが、昨年オオルリのいた所で、この時期としてはめずらしいコガラを確認した。5家族9人のお子さんが参加され、楽しい一日だった。

鳥の観察会に参加して（小学校4年生 若目田智之）

鳥の観察会に初めて参加しました。初めはツバメを見ました。最初にツバメの巣を二つ見つけて、そのあと一つ、帰りに一つ見つけました。ツバメを見おわたたら山をのぼって、てんぼう台で休けいしました。そこで鳥を見ようとしたのですが、全然見つけれませんでした。次の休けい所でも鳥を観察しま

したが、やはり鳥を見られませんでした。しかし、野鳥の会の人達が用意してくれた望遠鏡でコゲラが見えました。野鳥の会でツバメ以外見えなかったのので、とってもうれしいです。

次にみのおのたきでお昼ごはんを食べて、ぼくが食べ終わったときハブニングがありました。サルが人のごはんをうばって食べてしまいました。それにこりずこんどは、おじいさんのを食べてしまいました。

そのあとかいさんしました。最後に昆虫館にいってびっくりしたことがあります。それはサソリをみてどくせいが少ないサソリでした。名前はダイオウサソリです。ぼくは昆虫館を3周してしまいました。

◎牧野ツバメのねぐら探鳥会

〈8/6〉定例をツバメのねぐら探鳥会として開催。暑い中歩くと、ハヤブサがすぐ近くの鉄塔にとまる大サービス、ここでは珍しいアマサギ、常連のミサゴなどが出てくれた。さて肝心のツバメの方かというとさっぱりいない。対岸へ連絡すると対岸の外側を飛んでいるとのこと。しばらくするとこちらからも見えてきた。しかしすごく遠くて小さい。数は相当いるようだが砂粒のようだ。それがちょっと残念だった。

◎柴島干潟平日探鳥会

〈8/23〉「柴島実験干潟」に到着すると、潮は大きく引いているが、肝心のシギ・チドリはイソシギとシロチドリが1羽ずつ。30分程シギ・チドリの出現を待ったが、その気配がないので十三干潟へ移動。こちらもソリハシシギ1羽のみ。猛暑（37℃）の中、シギ・チドリとの出会いに期待し、参加されたみなさんには、少し期待はずれの探鳥会だった。

定例探鳥会

◎枚岡公園定例探鳥会

〈7/1清掃探鳥会〉午後より雷雨の予報の中、展望台まで清掃しながら登り、午前中で解散した。なお、この時期楽しみにしているアオバズクは、確認できなかった。



● Chapter 2 ●

『オジロビタキに「極東形」?』に即答

I. はじめに

2006年6月のある日、ケイタイに、ほんのたまにしか来ないメールが、古い鳥友から入りました。『オジロビタキに「極東形」がありますか?』という質問でした。これを見たとなん、私はぴんと来ました。以前、次のようなことがあったからです。

II. 「極東型」は極／曲論?

1999年11月イギリスの雑誌 BIRDING WORLD (12-11号)に「スウェーデンにオジロビタキの東種 (albicilla) が飛来—西ヨーロッパ初記録」という記事が載りました。その中で『日本の野鳥』(叶内/1998、山と溪谷社)に出ている「2枚の写真の若鳥は西種の特徴を全て備えているので、日本で撮影されたことが証明されるまでは西種と見なしておく」との趣旨の記述がありました。これに対して、私は「愛知県で撮影されたこと。日本で記録される西種は、現在の分布域から考えて日本で越冬しそうになく、ひょっとしてカゴぬけかもしれないが、貴見をお聞きしたい。」と、記事の主筆者 Svensson 氏に手紙を書きました。

その2ヶ月後、同雑誌(13-1号)に、1998年2月に鹿児島県で撮影された西種の♂成鳥の写真とともに Gordon Hay という人(日本在住?)の投稿記事が掲載されました。その記事の〈編集者注記〉に Svensson 氏の下記趣旨の意見が付記されました。

「大阪の塩田からも来信あり、日本の西種はカゴぬけの可能性があると云っているが、そうではなく“純正の渡り鳥”(“genuine migrants”)ではないか。西ヨーロッパにシベリアからの渡り鳥が来ているように、極東にも同様の状況があるのだろう。(渡りの方向が)逆になっているだけである。ただ、極東には未知の分類の個体群 (population of unknown taxonomic position) が存在する可能性がある。」

2003年11月になって突然 Svensson 氏から、4年前の手紙に対する返信がありました。その趣旨は概ね下記の通りです。

「西種が日本に“自発的に”(“spontaneously”)越冬する可能性は低いとする貴殿に同意する。〔日本で記録され

る西種は]カゴぬけか“西／東複合体”(“parva/albicilla complex”)か“未知の形態的変異個体”(“unknown morphological variations”)かも知れない。引き続き注意し、よく観察してメモをきっちり取ってほしい。その後、東種はイギリスとデンマークで各1羽の記録があり、フランスやノルウェーでも未確認ながら記録がある。東種が西に進むように、西種が東に迷行する可能性は排除出来ない。しかし、旧北区の小鳥類 (Palearctic passerines) が東に迷行するについての妥当な説は今のところない。」

その後、2004年10月、知人で Svensson 氏の著書の件で連絡を取り合っているバンダーから、S氏が極東のオジロビタキについて知りたがっているとの電話がありました。やはり気になっていたのでしょう。

さらにその後、2005年10月、イギリスの別の雑誌 BRITISH BIRDS (98-10号)に、イギリスの2例〔2003/4、2003/10〕の東種の記事とともに Svensson 氏が主筆するオジロビタキの分類について、かなり詳しい論考が掲載されました。しかし、ここには「繁殖が重複していると思われる地域〔塩田注：ウラル山脈〈概ね東経60度〉の南北の中央部〈概ね北緯60度〉付近のやや広い地域〕の両方の分布状況についての情報がほとんどないので、この地域を訪れる人は、両種の罅りに明瞭な違いがあり識別が可能なので、よく観察して報告してほしい」と書かれていますが、極東については何ら言及されていません。

このようなことから、私が想像するに、ヨーロッパの人(研究者も観察者も)は極東の(繁殖のみならず越冬についての)状況を殆ど知らないのではないか。そのため、日本で西種が記録されることに戸惑いみたいなものを感じ、そこで思いついたのが「未知の極東型」ではないか。S氏は今も「極東型」について調べているに違いありません。というのはS氏は著名な鳥類研究者で、スズメ目については特に詳しく、著書 (Identification Guide to European Passerines) は(日本の)バンダーにとってはバイブルと言っているでしょう。

III. 西種は“自発的”それとも“他発的”?

「東種がヨーロッパで記録されるのだから、西種が極東で記録されてもおかしくない」という考えは、ことオジロビタキに関しては即座には信じられません。なぜなら、現在判明しているのは、東種はウラル山脈の西側にも繁殖地域があり西ヨーロッパへは陸続きで近いのです。他方、西種はウラルのすぐ東側までしか繁殖域がなく、そのあたりからの西種の越冬地は最も東でもインド亜大陸の西半分くらい(インドとパキスタン)まで。それから東(インド東部、ネパール南部、バングラデシュ、中国南部及びインドシナなど)で越冬するのは東種です。

このようなことから、西種が“自発的”に(自力で)日本

まで越冬に飛来する可能性は非常に低いというのが私の推測です。“他発的”に日本にやってくるなら、それは何らかの形で、直接、間接を問わず人の手が働いている筈です。いわゆるガゴぬけについては、2000年2月にモスクワの業者から支部宛に送られてきた「ロシアからの鳥獣の輸出情報」というリストに載っていた123種の鳥の中に、マダラビタキとともにオジロビタキ (Ficedula parva) が含まれていたことが、ひとつの根拠になると思います。尚、「カゴぬけ」は“人が飼育したものが逃げ出した”のみならず、外国から持ち込まれ〔輸入され〕たものが逃げ出した或いは放たれた（それも日本国内のみならず外国でも）場合も含まれるという広義で使っています。また、逃げ出したのが、日本国内ではなく外国であっても、それが後日あるいは後年、日本に飛来する場合も含まれます。この場合、私は“二次的カゴぬけ”と言っています。

IV. 今後の課題

現在、東西種の識別点となっているのは、ヨーロッパでの観察、捕獲及び標本に基づくものです。特に標本が大きなウエートを占めているようですが、標本の中に極東及びシベリア東部のものが、少なからず含まれているのかと気になるところです。「未知」と言うことから、あまり（ほとんど）含まれていないのかも知れません。

前記の日本の記録(写真)の他、大阪でも大阪城の個体(1996/11第1回冬羽)がイギリスのD氏とフィンランドのJ氏により西種であると判定されました。この件については、森岡照明氏が『バーダー』(1998/9)で「D氏はJ氏の記事に則って同定しており〔J氏と〕同じ結論になるのは当然」と記しています。このように両種の識別点は殆どヨーロッパ人によるものに準拠しています。ひょっとして、極東に未知の個体群がいて、東種でありながら西種の特徴を持っている個体(特に若鳥/♂)がいるのかも知れません。いずれにせよ、「極東型」を見聞きされた方は『むくどり通信』に短報でも投稿してほしいと思います。

今後、日本に飛来する個体は、ヨーロッパで普通にやっているように、精緻な観察、詳細且つ正確なフィールド・ノート、撮影の後、出来れば全て捕獲して精査すると意外なことが判明するかも知れません。これにはバンダーの協力が欠かせません。支部会員の中には少数ながらバンダーがおられます。精査して結果を『むくどり通信』に発表してほしいと思います。尚、本稿の一部は『むくどり通信』[No.128/130/131/148]に発表した内容と重複しています。BIRDING WORLD 誌(12-11号)の識別点については『むくどり通信』No.148をご覧ください。(2006/07/19記)

リレエッセイ

初めての探鳥会 市来田 鶴子

この2・3年、やっと本気でバードウォッチングに興味を感じだした私……。いったいいつ頃から始めたのだろうかとか調べてみたら、なんと10年も前の野鳥の会の会員証が出てきた。だから「初めての探鳥会」は遠い昔の物語となってしまった。

鳥といえば、スズメ・ハト・カラスくらいしか知らなかった私は、ヒヨドリやムクドリが身近にいるということがまず驚きだった。キジバトとドバトの違いも解らなかった。それなのに多くの方がいとも簡単に、飛び回る小鳥をすばやく見つけては鳥の種類やオス・メス、そして若鳥か成鳥かの判別までするのが神業に思えた。

ベテランさんが望遠鏡で見せてくれた鳥の美しさは理屈を越えて私の心を打ち、私もいつか一人前のバードウォッチャーになろうと心に誓った。

しかし、私がバードウォッチングを始めたきっかけは、

当時、登山とマラソンに熱中し、加齢と共にハードなスポーツが出来なくなったときの為にとというのが、正直な理由だった。そして、忙しさに忘れかけては思い出しつつ、ダラダラと月日が過ぎてしまった。予定通り(?)、今ではマラソンは卒業し、年に数回の登山は続けているが、生活の大半はバードウォッチングに費やす日々となってきた。長い間、あまり性能の良いくない双眼鏡を使い、買い換えたときに、「もっと早く買い換えればよかった」と嘆いたものだが、昨年思いきって望遠鏡を買ってつくづく思うに、視力が悪くなり、特に動態視力が衰え、更に耳も聞こえにくくなった今、「もっと若いときに良い道具を使って始めていたら今の何倍も楽しめたらうに……」と、悔やまれてならない。

とはいえ、「まだ未熟だからこそ、これから何倍も上達する楽しみがある。」と負け惜しみ半分に意気込んでいる昨今なのです。

★編集部より：むくどり通信では皆さんの「初めての探鳥会」を募集しています。

ベテランの方もビギナーの方もご遠慮なく投稿してください。

思いました。この池の公園にはカリン・サクラ・ボケなどの植物が生えているのに、自然に最初から生えている植物はセイタカアシくらいしかないのには驚きました。これから橋ができるそうですが、その工事がここにすんでいる動植物に害の無いようにしてほしいものです。

(本田 理)

あの時間帯はちょうど鳥も少なかったのですが、色々新しい発見をすることができ、とても楽しむことができました。特に、あの大きなアオサギを望遠鏡で見たときは興奮しました。野生で、あれほど大きく身近にいたことと、スコープで覗くと、そのレンズの向こうにすぐ鳥がいるようでわくわくしました。先生がおっしゃった「エサを食べている瞬間」を僕は見つけ目の当たりにしました。白い中ぐらいのサギが地面に口を突き刺し、おいしそうにパクパクしているのを見て感動しました。NHKの「自然とあそび」やTVの色々な映像では見たことがありましたが、生で見たのは初めてでした。とても貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございます。

(吉岡寛歩)

バードウォッチングで鳥を見せてもらって、すごくかわいかったです。双眼鏡で見て、すごく毛がふさふさで、水浴びしている姿は本当に可愛かったです。粟が池はた

んぼのために使うためだとわかりました。でも、今は建物が増えて、たんぼが減り自然が減ったなあと思いました。池の真ん中にある「ちよぼ」は鳥が休めるように作られたことがわかりました。動物に優しいと思いました。

(流 知美)

粟が池には奥の深い歴史がつまっているんだなあと感じました。すごい昔からできていて、その自然が今もまだ残っていて、鳥たちの大事な池なんだなあと思いました。

(宮内佑樹)

私は粟が池ではめずらしいソリハシシギという鳥が見られてとてもうれしかったです。ソリハシシギは私たちのために“ボランティア”で来てくれたのかな？と思いました。でも、粟が池の水がなかったのが、ちょっと残念でした。それと工事中の音がちょっと気になりました。でも、野生のサギが飛ぶところを見られてすごく感動しました。私は13年生きているけれど、こんな身近にある粟が池の前をいつも普通に素通りしていたけど、よく見てよく学ぶと、こんな野鳥の色々な発見があるんだなあとまたひとつ学びました。私はこれから粟が池を通るときは注意して野鳥を見ていき、もっと粟が池のことを学ぼうと思います。教えてくださいまして本当にありがとうございました。

(山本沙知)

塩田 猛さんの..... 野鳥講座

Chapter 3 レンカクや尾羽根の数は別格や

I. はじめに

2006年6月奈良県で記録されたレンカクについて、シギ・チドリの羽衣、換羽、年齢を精力的に観察・撮影・分析している橋本宣弘君から「写真に長い尾羽根が3枚写っている」との知らせをもらいました。

一般的に、尾は中央の1対が外側の羽根とは色や形などが異なっていることが多いようです。例えばキジでは、レンカク同様非常に長く模様も特徴的です。シギ類ではオジロトウネンが白いのは外側の3対のみで中央の1対は黒褐色、残り2対は灰色です。また、スズメ目でも同

様で、例えばジョウビタキでは外側5対はよく目立つ赤橙色ですが、中央の1対は黒色で尾を閉じると赤橙色は黒色の下に畳み込まれて見えなくなり、上から見ると尾は黒く見えてしまいます。

II. 尾羽根の数

このようなことから、私はレンカクの尾も長いのは中央の1対のみだと思っていました。レンカクは、特にインドで数多く見たのですが、目の前を優雅に飛んでいるとついつい見とれてしまい、尾羽根の数まで意識したことはありませんでした。

橋本君の写真に3枚写っているということは、少なくとも2対あると考えられます。この鳥は一体羽根は何枚あるのだろうか、いつものように手もとの資料を色々調べてみました。先ず、図鑑類では日本のものも外国のものも、1冊を除いて記載がありません。これは予想通りです。記載があったのは“SHOREBIRDS” (1986) [世界のシギ・チドリ類] で、中央尾羽根は2対と記されています。しかし尾羽根は全部で何枚か記載されていません。

では、主に標本に基づき記載されていると思われる旧い本はどうだろうかと思い、日本のもの（黒田—1914, 1934・内田—1914, 1921・小林—1965など）、外国のもの（インド、パキスタン、スリランカ、ミャンマー、ホンコンなど）を見てみましたが、記載があっても「中央尾羽根が長い」というのが大半で、わずかに『日本鳥類図説』続編（内田清之助—1921）と『世界の鳥ハンドブック』（1996）に「2枚」と記されていました。

ここまでの調査結果は消化不良ですが、とりあえず橋本君に返事をしました。資料の記載がまちまちなので、その後も、はたして長い羽根は4枚で正しいのか、尾羽根は全部で何枚あるのかと気にかかりました。そこで、あまり期待できないが、未だ見ていない本を幾冊か取り出し追加調査したところ、やっと1冊、次の記載に出会いました。

「シギ・チドリ類は、ハリオシギやチュウジシギなどを除き、通常、尾羽根は12枚。ただし、レンカク科とタマシギ属は10枚。レンカクは中央の4枚の羽根が長い」。この本は出版年が、私の所有している鳥の本の中で2番目に古く1899年（私のものは1959年の復刻版）で“BIRDS-The Cambridge Natural History”という本です。鳥の歴史から分類まで全般的に書かれています。分類や学名が現在とはかなり違って、多少読みづらいのですが、思わぬことが書かれていて、時々参照しています。

上のことが判明してほっとしていた時、橋本君からまた連絡があり『鷗千鳥類図説』（黒田長礼—1914）に「幼鳥の尾羽根は10枚」と表に出ているとのこと。本文には記載されていなかったため私は見落としていました。その表には台湾と中国で入手した幼鳥3羽（9月と10月）について各部の測定値とともに尾羽根の数が載っていました。成鳥についてはなぜか空白になっています。

Ⅲ. 今後の課題

上記の資料で判明したことは、出来れば、現物（野外観察・撮影、標本、死体）で検証して確認したいものです。標本や死体は羽根が抜け落ちていたり、換羽中であったりする可能性があります。この点に留意して、機会に恵まれた方には検証結果を発表していただければと思います。鳥のことはまだまだ判明していないことがいっぱいです。アマチュアの活躍のチャンスがどっさりあることは間違いありません。学者・専門家は、少なくとも日本では、このような作業はまずしないでしょうから。

Ⅳ. その他のこと

①虹彩の色

成鳥の繁殖羽では黒っぽくてチャーミングな目をして見えます。しかし、冬季に見る個体は黄白色のものが多いようです。日本での非繁殖期の記録は若い個体（幼鳥や

第1回冬羽）が多いようです。私のあやふやな記憶では、冬季でも目の黒い個体もいたように思います。そのような写真を見たこともあります。（ただし、写真は光の状態により正確な色が出ないことがあり要注意）。私は、若い個体では黄白色、成鳥は冬羽でも黒っぽいと推定していますが、長年確認できずにいます。

これまで調べたところでは、殆どの資料（国内・国外とも）には、若い個体については記載がなく、ただ1冊『日本の野鳥590』（大西—2000）には「成鳥夏羽では焦茶色、冬羽では暗褐色。第1回冬羽では淡黄色」と記されています。その後出版された『シギ・チドリ類ハンドブック』（氏原—2004）では第1回冬羽の虹彩は黄白色に描かれています。これは、著者によると、ネットで集めた写真の結果とのことでした。

虹彩の色についても、出来るだけ多くに個体の観察により確認する必要があると思います。特に海外探鳥をされる方に期待しています。

②雨覆のパターン

冬羽では雨覆（大・中・小）が一様なものと横縞のものと2パターンがあるようだと言橋本君から指摘がありました。前記の“SHOREBIRDS”には「冬羽では中・小雨覆は、程度の差こそあれ、淡褐色の羽根あるいは白色に褐色の横縞のある羽根に換わる」と記載されています。大雨覆については言及されていませんが、色々な写真では大雨覆も同様です。小雨覆の翼前縁部〈前縁雨覆〉は常に白色です。このパターンの違いは個体差、性差、年齢差あるいはそれ以外なのか、これについても今後の課題です。

③カゴぬけの可能性

橋本君によりますと、今回の個体は尾羽及び肩羽に部分白化が見られるとのこと。白化は遺伝子に起因するものの、飼育下などで餌不足や栄養不良、先年のクロエリセイタカシギのように近親交配による部分白化などが考えられます。遺伝子や餌不足による場合は羽根の基部が、餌不足が徐々に改善されると羽根の先端に白色が出る（色素欠乏）ことがあるそうです。いずれにせよ、絵画のモデルとしてはレンカクはクロエリセイタカシギをはるかに凌ぐ魅力を持っていると思われます。飼育されていた可能性は低くないと誰しも思いたくなることでしょう。

私は、セイタカシギと同様、レンカクも近年やや急速に記録が増加しているように思えてなりません。

◎お詫びと訂正

むくどり通信No.187「塩田 猛さんの野鳥講座」に下記の通り誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

- 1) 表題と I. はじめにの本文3行目 極東形 → 極東型
- 2) P.9 右列・21行目 両方の → 両種の
- 3) P.10 右列・9行目 (特に若鳥/♂) → (特に若鳥/♀)



● Chapter 4 ●

『レンカク船の唄』はエレジー

I. はじめに

レンカクの尾羽根のことを調べていて、ひとつ気がついたことがあります。鳴き声です。私は、日本ではレンカクは観察していませんので、鳴き声が記録されているかどうか知りません。日本の図鑑には「子猫のような声でミャーオ」、「チューチュー」、「繁殖期にピーピー」など、外国の図鑑では「繁殖期に、特有の遠くまで届く、鼻にかかった猫が鳴くような (nasal mewling) 声で、“me-e-ou” “me-e-on” “me-onp” などと鳴き、冬季は主に群れが驚いて飛び立つ時に、特異な、鼻にかかった猫が鳴くような (nasal mewling) “tewn” 〈テューン〉という声が聞かれる。1羽が鳴くと近くの鳥も鳴き出すことが多い」などと記されています。

II. インドで聞いた鳴き声

私がインドで聞いたのは「ミャ〜ン」あるいは「ミュ〜ン」という鳴き声です。目線と同じ高さの水面を繁殖羽の個体が3〜4羽横一線に並んで、至近距離を水平に飛びながらこの声を出していたのをよく憶えています。多分複数の個体が鳴いていたのでしょう。よく聞こえる、大きな声でした。

この「ミャ〜ン」は少し鼻にかかった、柔らかい感じで、悲しげに聞えました。懐メロが大好きな私には、菅原都々子の『連絡船の唄』(昭和26年)を連想させます。お国なまりが今さら悲しと、帰るあてない人を見送り、私一人を捨てて行くと、波止場で涙する女のエレジーです。レンカクの声はこの歌手の、少し鼻にかかった高音の歌声と何となく感じが似ているのです。

III. 鳴き声の考察

ところで、日本の図鑑類に記されている上記の鳴き声のうち「チューチュー」はおそらく“tewn”に当る冬季の声でしょう。また、「ミャーオ」は繁殖期の声に違いありません。いずれも断片的な記述です。他方、「ピーピー」はバードウォッチャーの大先輩、高野伸二氏の『野鳥識別ハンドブック』(1980/日本野鳥の会)に記されていて「ピーピーと子猫のような声を発するという」と引用的な

記述です。その後発行された『フィールドガイド日本の野鳥』(1982/日本野鳥の会)では、全く同じ記載で断片的な書き方になっています。

高野さんは、恐らく外国の文献から引用されたのだと推測しますが、この「ピー」は日本人の耳には「ミー」と聞こえるのだと思います。これと関連していまひとつ思い当たることがあります。それはタシギの繁殖期の鳴き声で、高野さんが「(外国の本には) bleat (或いは bleating) と書かれているが、これは羊や山羊の鳴き声だが、どうも解せない」との趣旨のことを書かれているのを、私は読んだ記憶があります。後年、上記の『ハンドブック』には「繁殖期ではディスプレイフライトの際、急降下しながらヤギの声に似た音を発するというが、5月上旬にそのような動作と音を千葉で記録したことがある」と明記されています。

英語国民には羊や山羊の鳴き声は“bleat”の他に“baa”とも聞こえるようで、イギリスの伝承童謡(マザーグース)には“Baa, baa, black, sheep”(メーメーめんようさん)で始まる歌があります。日本では『めえめえ子羊』です。このように言語が異なると人が聞く音や声も表記が異なるものです。上記の例では英語の“B”音が日本語では“M”音となっています。高野さんが解せなかったのは「めえ」がなぜ bleat と “B”なのかということであったかも知れません。因に上記の英語図鑑の記載にある“tewn”には“mewing”(猫が鳴くような)という形容詞がついていますが、日本人の耳に聞こえるのとは異なった表記となっています。さらに、外国のカモメ図鑑でウミネコの記載を見ますと、鳴き声は「重々しく、悲しげな、しゃがれた猫が鳴くような声」として、“kaoo”〈カウー〉や“yark”〈ヤーク〉などと表記されています。これらも日本人に聞こえる猫の声とは異なる表記です。このように、鳴き声は外国語の表記を参考にしたり引用する時は、かなりの注意が必要です。

IV. おわりに

日本では近年レンカクは記録が増えているとはいえ、未だ珍鳥です。繁殖地(例えばインド)では周年見られます。でも、私は冬季の声は記憶にありません。近くにいた多くの他の鳥に目移りして聞こえなかったのでしょう。図鑑には鳴き声の記載がなかったり、あっても各書で記述にかなりの違いがあります。図鑑の解説を書く方には、虹彩の色などと共に、次回の改訂版或いは新版発行の際には、現地で自らの観察により身に付けた鳴き声を詳記していただければ有り難いと思います。ただ、インドの繁殖期は日中の気温は40度を優に越えますので、ある程度の覚悟と準備が必要です。(2006/08/19記)



「属」にぞくぞくしてみませんか

I. はじめに

バードウォッチングを始めた後数年間は図鑑や古書店で買い集めた昔の本を片っぱしから読みました。そんな中で「1科1属1種」と特記された鳥がありました。ヤツガシラです。1つの科に複数の属があり、1つの属に複数の種があるものが多い中で、ヤツガシラはかなり特異な存在です。図鑑の絵を見ただけでも、一度は見てみたい鳥でした。後年（1975～1978）インドに滞在し、この鳥を見ない日はほとんどない生活が続きました。自宅の庭にも毎日のようにやって来ました。

この鳥の特異性を読んだ時に、気になったのは、意外にも「属」でした。「目」や「科」は図鑑に日本語の名称が書かれていますが、「属」は書かれていないのです。

II. 「エンベリザ」は便利だ

野鳥の会に入会し探鳥会に参加すると、先輩の皆さんが「エンベリザ」と口にされるのをよく耳にしました。ホオジロの仲間のことですが、「ホオジロ属」という日本語名が図鑑に出ないためでしょうか、学名の一部である属名 *Emberiza* をそのまま使われていたのです。この属名はローマ字式に読むのもカタカナで書くのも容易です。「今のエンベリザは何だった？」とか「エンベリザの地鳴きを憶えよう」などと言っていました。ところで、ホオジロの仲間はすべて「エンベリザ」とは呼べないのです。和名に「…ホオジロ」が付いていても、ツメナガホオジロやユキホオジロは「エンベリザ」とは呼べません。同じ「科」ですが「属」が違うのです。他方、「…ホオジロ」が付いてなくても、アオジ、オオジュリン、チャキンチョウなどは「エンベリザ」と呼べるのです。このような例は他にも少なからずあります。もうひとつ例をあげますと、ヒタキ類です。コサメビタキ、サメビタキ、エゾビタキは同属です。また、キビタキ・オジロビタキそれに「ヒタキ」と付いていないムギマキは同属です。さらに、オオルリはまた別の属です。しかし、ルビビタキ、ジョウビタキ、サバクビタキ、コルリなどは「属」は勿論それより上位の「科」も別です。ここに取り上げた同属の各種同士は、姿（形態）や動作（習性）がよく似ているのに気付きます。

III. 「属」でまとめる

このように、「属」毎にグループ分けして鳥を眺めたり考えたりすると、類縁関係がわかりやすく、ひいては鳥を少し深く理解出来たり、識別に役立ったりします。

「属」を憶えることを勧めておられる坂根 干氏の著書『野鳥ものがたり』（1982/たたら書房）を紹介するため、私は『むくどり通信』（No.41-1982/8）に一文を寄せましたが、この著書は属や分布の他、副題の通り「京阪神の水辺の鳥」の消長も分り、一読をお勧めしたい本です。

IV. 「属」は学名で知る

どの鳥同士が同属なのか、また、ある鳥が似た鳥と同属なのか別属なのかを知るには、図鑑に書かれている学名の属名（アルファベットで記されている2語のうち前の語）を見ます。スペルを見比べるだけで十分です。日本語の属名は、図鑑には出ていませんので、知りたい方は『日本鳥類目録』改訂第6版（2000/日本鳥学会）をご参照下さい。以前、『支部報No.82』（95/2）に「属」（一部）の一覧表を掲載しましたが、その後一部変更されましたので『目録』を参考して下さい。

V. 学名の楽しさ、面白さ

私は1969年に日本の鳥の学名の暗記を始めました。その途上、暗記した後に出版された図鑑や目録などで「属」が変更されるものが出てきました。変更されれば暗記のやり直しが必要です。バードウォッチングを始めてまだ年月が浅いころ、内田清之助の本でコマドリとアカヒゲの学名が逆になっている背景を読み、学名は変更されないことを知りました。命名規約で「一度創設された以上属又は種の名称を……後になって破棄できない」ことになっています。しかし、これは基本的な規則であって、実際は研究者や著者の考えで分類が変わると、属が変更されたり亜種が独立種になったりして、結果的に学名が変わってしまいます。私が暗記した時から学名が大きく変わったのは、例えばキアシシギは *Tringa incana brevipes* で、メリケンキアシシギと同種の別亜種でしたが、これが後年、*Heteroscelus* 属に移され、さらに独立種とされたため、種名を表す学名は *Heteroscelus brevipes* となり表面上は全く別の種になってしまいました。同様のことはダイゼンとムナグロにも起こりました。当時、ダイゼンは *Squatarola squatarola*、ムナグロは *Charadrius dominicus fulvus* でアメリカムナグロと同種でした。それが後年、ダイゼンもムナグロも属が変わり同属となり、さらにムナグロは独立種となり、夫々 *Pluvialis squatarola* と *Pluvialis fulva* となりました。当初この両種は「属」が違うからには何か相違点があるに違いないと考え、ひょっとして後趾の有無ではないかと思いましたが、今は同属なので考える必要がなくなりました。

このように、学名は規約上は不変ですが、変わります。一旦憶えても変更されれば憶え直さねばならず、ちょっと厄介です。でも、変更はさほど多くなく、変更されたのをきっかけに、新しいことが分かったり意外なことに気付いたりして、利点も少なくありません。ここにも、私が「学名のすすめ」を唱える所以があります。

VI. マミジロに頭の中が真っ白！？

ある時、マミジロに付いて調べようと、出版されて間もなく入手した“THRUSHES”（Helm社／2000）〔大型ツグミ類〕で索引の Turdus（ツグミ属）の項を見ました。しかし、何度見ても見当たらないのです。英語名で本文の項を開き学名を見たところ、Zoothera 属に変わっていました。トラツグミがこの属に移っていたのはつとに気付いていましたが、マミジロも変わっていたとはうかつでした。《トラツグミとどこが似てんねん！》と思った次の瞬間ハッと気付きました。翼下面の白帯です。では、この白くてよく目立つ翼帯の意味するものは何だろうかと、それまで考えもしなかったことを考えていました。鳥は伊達や酔狂で模様や柄を付けている訳はないのです。Zoothera とは「生き物を狩る」という意味で、日本語名は「ジツグミ属」と言い、いつ見つけてもほとんど地上ばかりのトラツグミの習性から、私はこの属名がはなはだしく気に入っていました。

VII. ジツグミ属の特徴

そこで、ジツグミ属の特徴（各種の共通点）はあの翼帯に違いないと予測し“THRUSHES”の36種全てにつき調べてみることにしました。翼下面の太い2本の翼帯は、小雨覆それに初列風切の内側数枚および次列風切全羽根夫々の内弁の基部にある斑が連なって帯状になっているのですが、他の本も調べた結果、36種全てに共通の特徴でした。《やっぱりそうだったのか！》。大半は翼帯が白色、一部のは汚白色や銀白色それに淡橙バフ色であることが判明しました。

では、この2本の翼帯はどのような時に利用するのでしょうか。色々な本を調べてみましたが、どこにも記載が見当たりません。私は恐らくディスプレイ（誇示行動＝求愛やなわばりの表現行動）の時に〔地上で〕翼を持ち上げるのではないかと推定しています。ひょっとしたら、このようなことは既に判明しているのかも知れませんが、私は知りません。ご存知の方はぜひご教示下さい。

VIII. 「属」日本語名の変更

私が気に入っていた「ジツグミ属」は『目録』では「トラツグミ属」に変更されています。36種のうち特に上面がトラツグミ的な種は少数です。36種全てを見渡すと、地上性の習性を持つこのグループの鳥は「ジツグミ属」の方がより適切だと思うのですが……。因に『目録』で「属」

連載

トリ鳥アラカルト

10. ゴイサギ

北村 武幸

ゴイサギはカラスくらいの大きさの鳥で頭部と背は緑色の光沢のある黒色、後頭から二、三本の白い飾羽がでる、胸と腹は白い、嘴は黒く、脚は暗黄色だ。

ゴイサギは平安時代から“いひ”の名で知られている。室町時代になって“ごいさぎ”“くらのとり”と呼ばれるようになり、鳥のなかで五位の位についた鳥はほかにいない。「平家物語」に延喜の帝、近衛天皇が神泉苑を訪れたとき、池の水際に「さぎ」がいるのを見つけて六位の家来を呼んで、「あのサギを捕まえよ」と命令した、その六位の家来は如何したものかと考えたが、命令であれば致仕しないと“さぎ”に「宣旨である」と言うと、飛び立とうとしていた“さぎ”はおとなしくなってじっとした、そこを捕まえて天皇にさしだした、天皇は「宣旨に従って神妙である」と五位を与えた。ところが捕まえた家来は六位で、五位の貴族になった“さぎ”の家来になってしまった。

しかしながら現在、和名で何々ゴイという日本の鳥はミゾゴイ、ズグロミゾゴイ、ササゴイ、ヨシゴイ、オオヨシゴイ、リュウキュウヨシゴイ、サンカノゴイ、ハシブトゴイがある。ところでゴイサギという名称はこれらの鳥の総称として用いられたのではないかとおもわれる、「大和本草」に現在のゴイサギに相当する鳥を背黒五位としているからである。

普通“サギ”類の中で一番目立っているのは、“しらさぎ”と呼ばれるダイサギ、チュウサギ、コサギ、これら三種は全身白色で、繁殖期には蓑毛を持っている。これらを区別しないで“さぎ”“しらさぎ”“しらとり”の名で奈良時代から知られてきた。

次に「風土記逸文常盤国」に青鷺がでてくる。さらにミゾゴイがでてくる“おずめとり（護田鳥）”とも言われた。これはミゾゴイが餌を捕るため田圃の沢にいて鋭い目をしているので田を守っていると考えたのであろう。また、“ひのくちまもり”の異名があるが、これも田に水を引く樋の流れ口を守っていると言う意味であらう。

参考資料：本草綱目啓蒙 図説日本鳥名由来図説

シーボルト日本動物誌

の日本語名が変更されたものを一部拾い上げますと

- シラサギ属 → コサギ属
- ツル属 → タンチョウ属
- ハジロ属 → スズガモ属
- チドリ属 → コチドリ属
- ホトトギス属 → カッコウ属
- セキレイ属 → ハクセキレイ属

ヒワ属 → カワラヒワ属

カラス属 → ハシブトガラス属

このように全て種名と同じ名に変わっています。しかし、ウ属はカワウ属などとせずに依然としてウ属のまま、全体として統一を欠いています。変更あるいは不変の理由は『目録』には残念ながら説明はありません。

(2006/08/28記)

第13回 鳥獣保護セミナーのご案内

これまで毎年7月に京都支部主催で、野生動物を守るために、国や自治体と自然保護を目指す人々が自由に懇談する鳥獣保護セミナーが開かれていましたが、今年で13回目となります。

今年のテーマは、「河川水辺の国勢調査を終えて～鳥類編～」です。日本野鳥の会京都支部で平成15年度と18年度の2回にわたって国土交通省から「河川水辺の国勢調査」を受託、18年度については当支部も調査に参加しました。これらの調査結果がいつ、どこで、どのように役立てられるのか等、また淀川のことをはばひろく話し合うことにしました。

淀川の調査結果については、国土交通省が「概要版」としてまとめていますが、今回特別に京都支部の好意で当日セミナー参加者に提供されますのでどうぞ参加下さい。この「水辺の調査・概要版」が、今後淀川流域で活動される皆さま方のお役にたてれば幸いです。

第13回 鳥獣保護セミナー

河川水辺の国勢調査を終えて～鳥類編～

開催：2007年7月13日(金) 19:00から21:00まで

会場：ぱるるプラザkyoto

(JR京都駅中央改札口を出て右手すぐ)

基調講演：宮本博司氏(もと近畿地方整備局河川部長)

テーマ：「通信教育で川をさわる事なかれ」

報告：ツバメの調査は早朝に限る？(船瀬、他)

費用：無料

主催：日本野鳥の会 大阪支部

日本野鳥の会 京都支部

詳細：大阪支部 橋本正弘

TEL/FAX. (06) 6352 - 0302

Eメール hm-hiro@tc4.so-net.ne.jp

京都支部 中村桂子

TEL/FAX. (075) 873 - 0660

Eメール k-naka@sd6.so-net.ne.jp

近畿ツバメのねぐら調査2007

昨年は近畿全体で19箇所の「ねぐら」で、約17万羽のツバメをカウントしました。

大阪のツバメのねぐらは

- ①淀川右岸、高槻市道鶴町の鶴殿のヨシ原
- ②淀川左岸、大阪市旭区大工大高グラウンド前のヨシ原
- ③八尾市福万寺町、恩智川治水緑地未着工区のヨシ原
- ④堺市西区の元緑池のヨシ原

で、約3万6千羽のツバメをカウントしています。(①④は非公開で実施。②③は昨年同様公開で実施予定。)今年③は8月4日(土)と②5日(日)に調査を実施します。

◎集合時間・場所

② 8/5・17:30・大阪市バス城北公園バス停前

③ 8/4・17:30・府立池島高校正門前

上記以外の場所においても「ねぐら」の存在が想定されますので、夕方ツバメが群れで飛び回っていたり、集まっているのを観察された場合は、次の情報を是非お寄せください。「ねぐら」はヨシ原だけではなく、街路樹や電線なども要注意です。

- 1. 観察日時
- 2. 場所
- 3. ツバメの大まかな数
- 4. ねぐら周辺の環境
(河川、たんぼ、ため池、住宅地など)
- 5. ねぐらの環境(ヨシ原、電線、街路樹など)
- 6. 観察者氏名、連絡先

◎情報連絡先

保護部 中野勝弥

FAX. (072) 444 - 4312

Eメール mnakano@silver.ocn.ne.jp





Chapter 6.1

よりどりみどりヒドリガモ

(羽衣の多様性) —前編—

I. はじめに

1978年2月、ようやく出版されたイギリスの大図鑑（第1巻）が手元に届きました。この図鑑は1938年に出版された図鑑（全5巻）を大幅に増補された改訂版で、各種が詳記されています。特に羽衣の記載が詳しく、私は自分がよく知っている〔と思っていた〕種を、暇を見つけてあちこち拾い読みをしました。ある日、ヒドリガモの羽衣の項を読み出して、頭に強烈なパンチを食らったような記述に出会いました。♀と♂エクリプスに4つものタイプ……褐色と灰色夫々に有斑と無斑……があると記されていました。

ヒドリガモはカモの中では普通種中の普通種。一見すれば♂は勿論♀も容易に識別できる鳥です。しかし、羽衣にいくつものタイプがあるとは全く気付いていませんでした。普通種なるがため、観察がおろそかになっていたのです。そこで、自分の目で確かめるべくヒドリガモ

を詳しく観察しようと考えました。実際に観察を開始したのは2シーズン後の1979年12月、昆陽池でした。昆陽池には2005年12月までの28シーズンに83回訪れ、多数のヒドリガモを観察・撮影しました。

II. 4タイプの羽衣

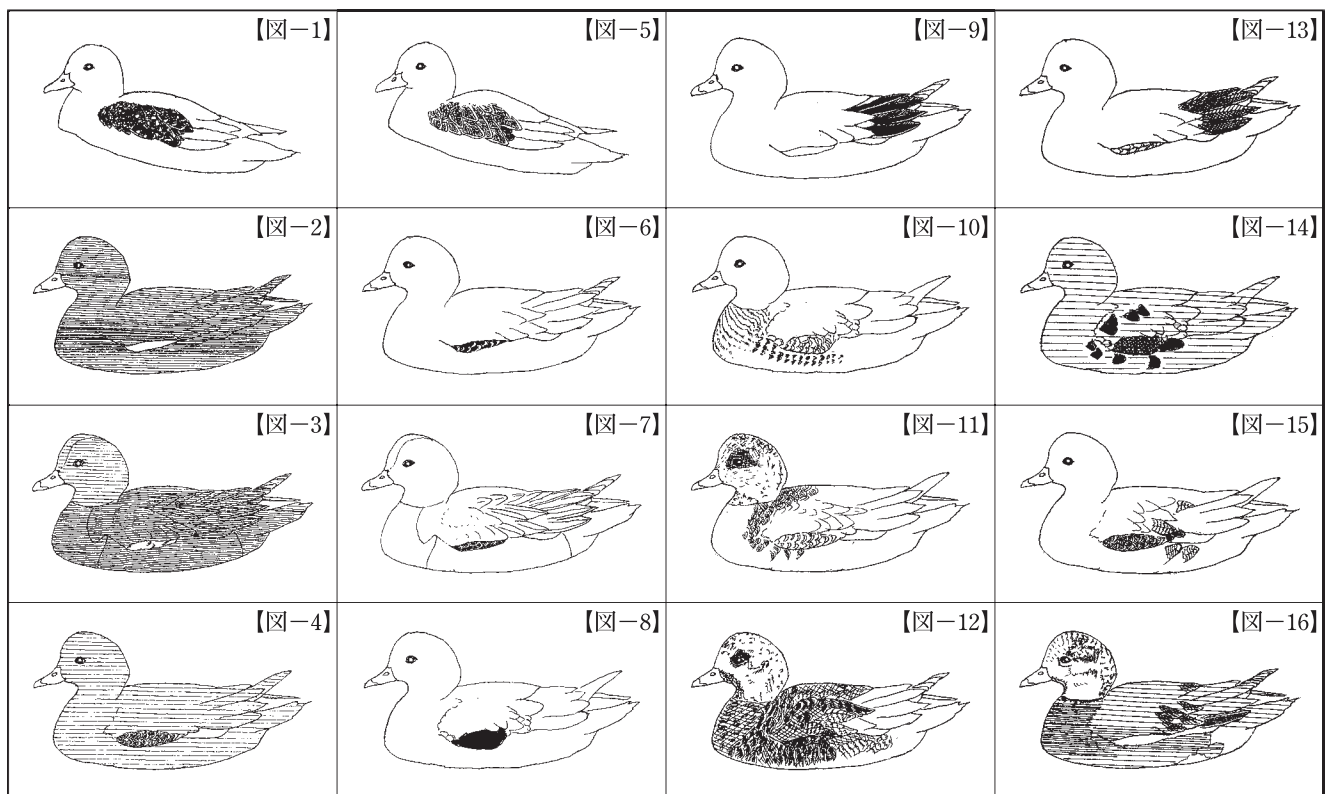
タイプには羽色と羽根の模様があります。まず、羽色に2タイプ（茶褐色と灰褐色）があります。羽色に差異が表れる部位は頭部・首・胸・脇等。これらの部位が、多少濃淡の差があるが（赤）茶褐色の個体（よく見かける羽衣）と灰褐色（茶褐色味が少なく灰色味が強い）個体があります。他方、模様は上面に表れ、特に上背と肩羽に見られます。これらの部位の各羽根に横縞や斑点等の模様がある（有斑）個体【図-1】と模様が全く或いは殆ど無い（無斑）個体【図-5】があります。これをまとめますと：

- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 茶褐色 —— 有斑 | 1. 有斑 —— 茶褐色 |
| 2. 茶褐色 —— 無斑 | 2. 有斑 —— 灰褐色 |
| 3. 灰褐色 —— 有斑 | 3. 無斑 —— 茶褐色 |
| 4. 灰褐色 —— 無斑 | 4. 無斑 —— 灰褐色 |

III. 羽衣による年齢識別及び性別判定

年齢は、生後1年を過ぎ完全換羽を終えると、一部の♂を除き、それより年長と同様の羽衣となり私には識別が出来なくなります。

性別は、成鳥繁殖羽では極めて容易であり、成鳥非繁



殖羽（エクリップス）や当年生まれの晩秋／初冬以降の個体ではつぶさに見れば可能です。

***** 年齢・性別を見る主なポイント*****

1. 成鳥繁殖羽……省略 [図鑑参照]

2. 成鳥非繁殖羽（エクリップス）

①雨覆

A) ♂

中・小雨覆いずれも全て白色、大雨覆（外弁のみ）も白色だが各羽根の先端が幅広く黒色。これらの白色部は開翼時には露呈して大きな白斑となり目立つ【図-27/46】。翼を閉じている時には、横から見ると体の中央部に横長白線【図-2】として見えるが、時に肩羽に覆われて見えないことがある。そのような時は翼を広げる（伸びをする）か緩めるのを待って観察すればいい。

B) ♀

中・小雨覆の各羽根は褐色で先端に丸みがあり白っぽい明瞭な羽縁があるため全体に鱗模様を呈する【図-31】。大雨覆にも同様の羽縁があるが先端がやや角張っており並んだ羽端は白線をなす個体が少なくない【図-38】。翼を閉じると、通常、鱗模様は小さな範囲しか見えず【図-6】、時に肩羽の下に隠れることがある。見えない時は翼を開くのを待つ。尚、次列風切の最内側羽根の外弁が幅広く白色でよく目立つので、雨覆の白色と誤認せぬよう注意が必要【図-4】。

②三列風切

A) ♂

上面後方に突き出るように見える4枚の羽根【図-9】の外弁が黒色で羽縁は細く白色。（注：最下側の羽根は隣接する次列風切最内側の白色の羽根と重なって1枚のように見える【図-43】）。

B) ♀

各羽根の外弁は黒色ではなく褐色或いは黒／暗褐色で、羽縁は淡い褐色【図-13】。最下側の羽根と次列風切最内側の羽根が重なって1枚のように見えるのは♂と同様。

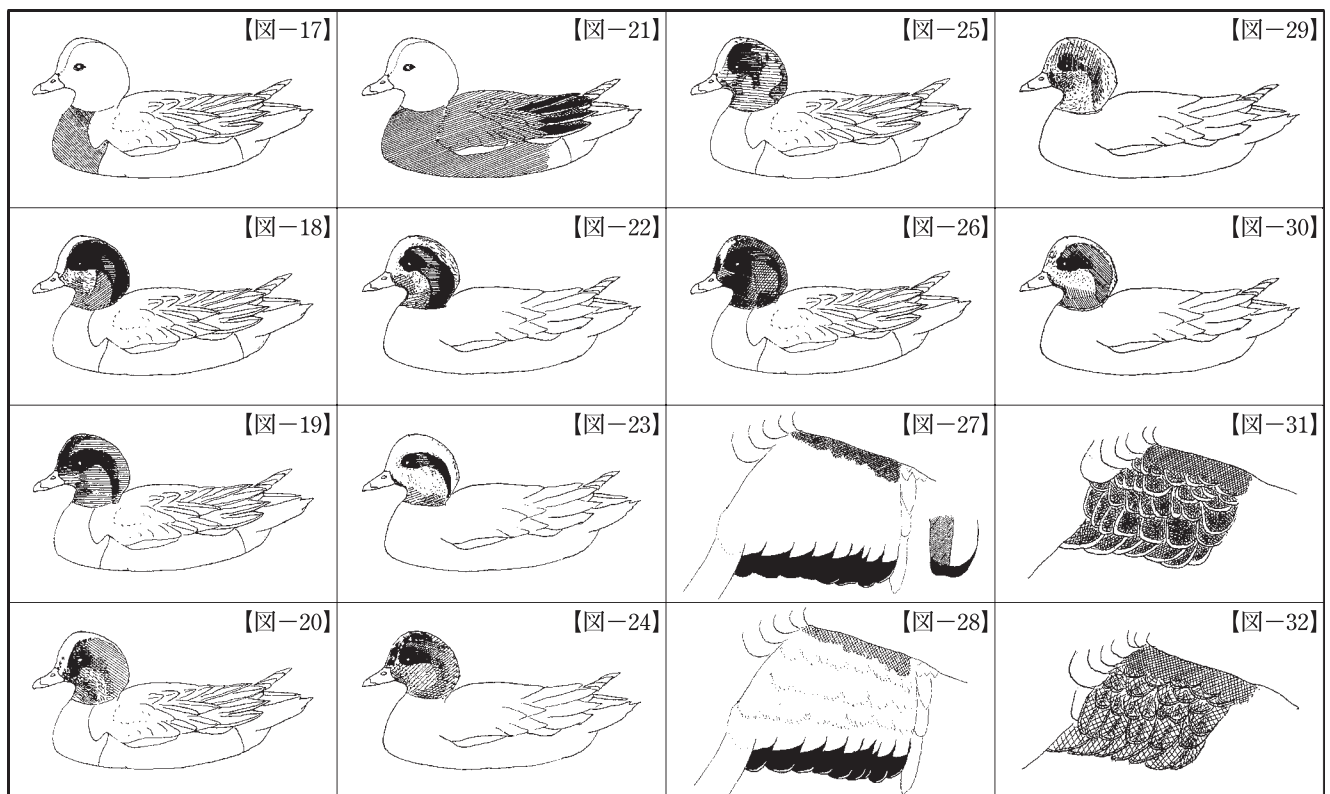
3. 第1回繁殖羽（生後1年未満）

（真冬には成鳥とよく似た羽衣になるが、以下の点に注目すれば区別可能。）

①雨覆

A) ♂

上面（肩羽・上背他）、胸、脇等に淡褐色の羽根があったり下尾筒が一様の黒色ではなく白・黒・褐色の斑状であったりするが、最もわかりやすい点は雨覆が成鳥の白色ではなく、ややピンクがかかった褐色であること。中・小雨覆各羽根には、個体差があるが、黄白色の羽縁があるものの鱗状は不明瞭で【図-7】、大雨覆にも個体差があり4～5タイプある【図-34/35/36/39】。頭部・胸・脇・上面等は真冬には成鳥と大差がなくなる。



B) ♀

幼羽根を残している個体は成鳥との区別は可能。

〔4. 幼鳥の項参照〕

②三列風切

♂、♀とも一部或いは全部の羽根を換羽する。幼羽根を残している個体は成鳥との区別は可能。

4. 幼鳥/第1回非繁殖羽

幼鳥は秋季では全体的に羽色が冴えず、特に胸・脇には不明瞭だが横縞が目立つ個体【図-10】が少なくない。成鳥との最大の差異は雨覆で、羽色が淡く鈍い上に羽縁の幅が狭く淡褐色（白色ではない）なので、鱗状は不明瞭【図-8/32/33】。大雨覆先端の羽縁が白色で、♀成鳥のように白線をなす個体もある【図-33/37】。

11月ごろになると、♂では脇や肩羽に灰色で虫喰斑のある成鳥タイプの羽根が生えてくるので性別の判定が可能となる【図-14】。このような羽根が生える前では性差が見当たらない。

時期が進んで真冬～初春（概ね1～3/4月）になると、♂は繁殖羽となるが雨覆が異なる【図-7/34/35/36/39】ので、じっくり比較すれば、成鳥との区別は可能。冬季になっても♂の羽根が見当たらない個体は♀と判断してまず間違いはない。

5. 第2回繁殖羽

♂で雨覆が一様の白色ではなく部分的に淡い灰褐色の斑状の個体が時に見られる【図-3/28】。通常、雨覆は生まれた翌年の完全換羽で成鳥の白色となるため、斑状

のある個体は恐らく前年生まれと思われる。♀では成鳥と羽色の差がなくなる。

IV. 変異個体

「変異」とは端的に言えば「通常でない」ことでその度合いは多様なため、その様な個体は注意深く且つ細かく見ないと見過ごしてしまいます。変異個体を見つけ出すには、通常の個体と比較することになり、その為には細かい点まで分っている必要があります。

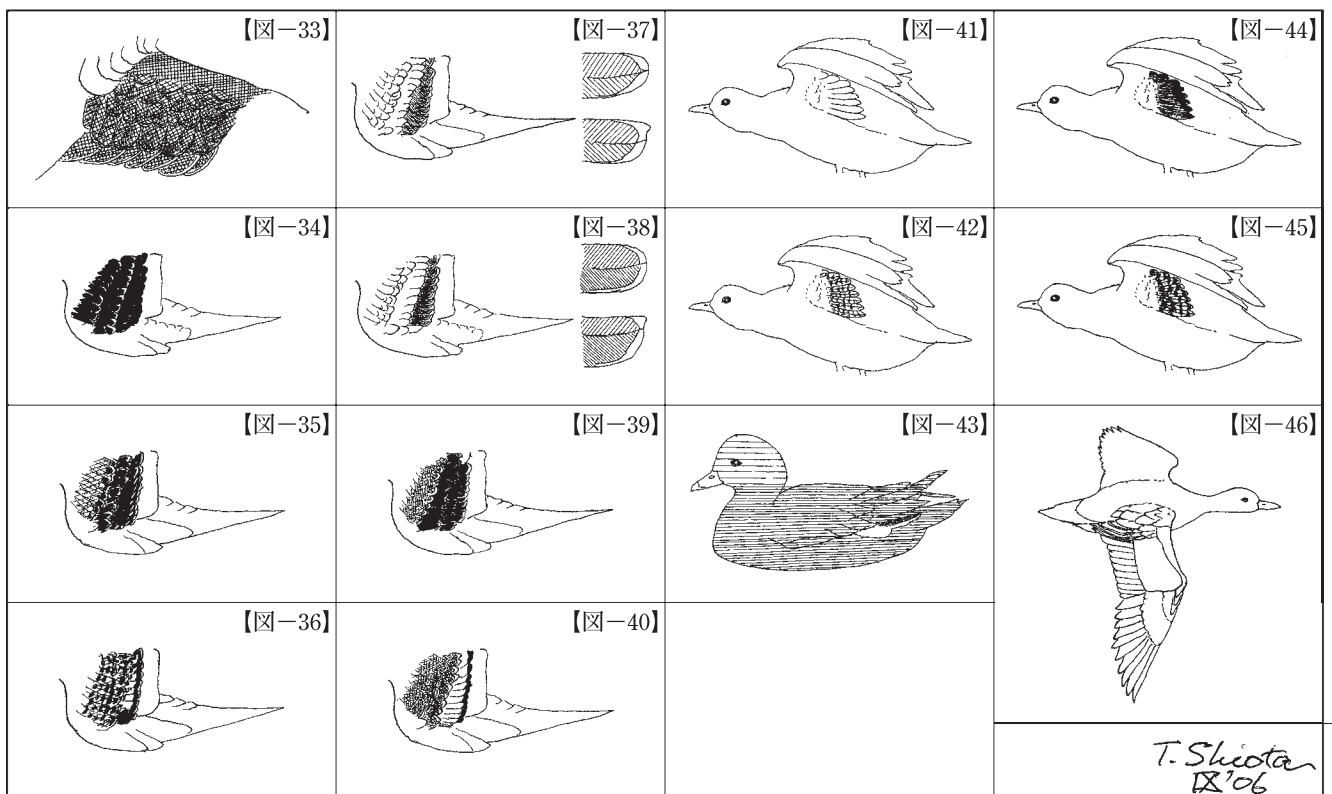
変異と思われる個体は羽衣が多様なため、ここでは変異の度合いが比較的大きいものについて取り上げます。尚、変異のなかには他種との交雑によると思われる個体もあり得ますが、判定が困難で、ヒドリガモと判断されたとしても、性別が不明確なものが少なくありません。

1. 変異個体《A》：♀？成鳥【図-40】

- ①体羽は総じて♀、
- ②三列風切は褐色で♀、
- ③中・小雨覆は鱗状で♀、

〈変異点〉は：

- ④大雨覆が白色で先端が黒色。これは♂と同様で、アメリカヒドリ♀のパターンでもある。また、資料によると♀でも個体により大雨覆が暗色ではなく白色とのことだが、私の観察では羽根全枚数ではなく一部のみ白色で、先端の黒色も一部の羽根のみである。しかし、これも変異なのかも知れない。



2. 変異個体《B》：間性？成鳥【図-15】

- ①全体的に♀の羽衣、
- ②雨覆（大は暗色、中・小は明瞭な鱗状態）
 <変異点>は：
- ③脇後部及び肩羽夫々の羽根の一部が虫喰斑のある灰色。

3. 変異個体《C》：♀？成鳥【図-11】

- ①体羽・翼（雨覆・三列風切も）概ね♀、
- ②上面（特に上背）から脇にかけての、♂では全体的に虫喰斑の灰色の部位に、白っぽい羽縁のある灰色の羽根が散在。
 <変異点>は：
- ③首と胸の羽色に濃淡が強く境界が明瞭で、且つ、目の周りとすぐ後部から頭頂にかけて黒っぽく緑色気味で♂的。

4. 変異個体《D》：♂？♀？他種との交雑？成鳥【図-12】

- ①三列風切は黒色味が強く♂的、
- ②雨覆は♀、
- ③下尾筒は2月になっても黒色は極小範囲で♀的、
 <変異点>は：
- ④頭部が暗褐色で黒っぽい小斑点が多数あり、前頭には淡色部がない、

- ⑤上背・肩羽・脇は虫喰斑のある灰色、
- ⑥首下部・胸・脇にかけての羽根は先端が淡茶褐色でやや太い黒褐色のサブターミナル・バンド（羽端すぐ下の横帯）があり、これらの部位は総じて黒っぽい縞模様に見える。これはいずれかの他種の特徴かも知れない。

5. 変異個体《E》：♀？成鳥【図-16】

- ①全体的に淡茶褐色、
- ②頭部の下半分・嘴の基部付近・喉・首前部等が特に淡色で部分的にかなり白っぽい、
- ③脇後部・下尾筒がかなり白っぽい、
 <変異点>は：
- ④雨覆が大きく白色で♂的。
 <注>このような個体は3羽のみ。2~3~4月になっても羽色に変化なし。

■紙面の都合上、以下の記事は次号No.192の掲載になります。

V. 間性

VI. ヒドリガモとアメリカヒドリの交雑個体（すべて♂）
 【図-17~26・29~30・41~42・44~45】

VII. おわりに

《年齢と性別識別ポイントのまとめ》

《イラスト略説》

【図-1】♂成鳥エクリプス及び♀	肩羽有斑（斑多様で個体差顕著）	【図-25】交雑個体ヒドリ型-D	
【図-2】♂成鳥エクリプス	雨覆横長白線（エクリプス性別重要識別点）	【図-26】交雑個体ヒドリ型-E	
【図-3】♂第2回繁殖羽	雨覆白地に淡灰褐色斑（年齢識別点）	【図-27】♂成鳥	（右翼）雨覆白色大斑（白色は各羽根外弁のみ、内弁は翼上面には露呈せず）
【図-4】♀成鳥	次列風切最内側（S10）外弁白色	【図-28】♂第2回繁殖羽	雨覆白地に淡灰褐色斑（年齢識別点）
【図-5】♂成鳥エクリプス及び♀	肩羽無斑	【図-29】交雑個体アメヒ型-E	
【図-6】♀成鳥	雨覆鱗模様露呈小範囲（重要識別点）	【図-30】交雑個体アメヒ型-D	
【図-7】♂第1回繁殖羽	中・小雨覆鱗状不明瞭（年齢重要識別点）	【図-31】♀成鳥	大・中・小雨覆鱗模様明瞭（要比較幼鳥）
【図-8】幼鳥・第1回非繁殖羽	雨覆鱗状極めて不明瞭（年齢識別点）	【図-32】幼鳥・第1回非繁殖羽	大・中・小雨覆鱗状不明瞭（要比較♀成鳥）
【図-9】♂成鳥エクリプス	三列風切（外弁）黒色（性別重要識別点）	【図-33】幼鳥・第1回非繁殖羽	大雨覆先端白色タイプ
【図-10】幼鳥	胸・脇に横縞	【図-34】♂第1回繁殖羽	大雨覆暗色で先端黒色タイプ
【図-11】変異個体《C》♀？成鳥		【図-35】♂第1回繁殖羽	大雨覆先端部白／黒／白色模様のタイプ
【図-12】変異個体《D》 ♂？♀？交雑？成鳥		【図-36】♂第1回繁殖羽	大雨覆白色多く先端白／黒色模様タイプ
【図-13】♀成鳥	三列風切（外弁）〔暗／黒〕褐色（性別重要識別点）	【図-37】幼鳥・第1回非繁殖羽	大雨覆先端（閉翼時）白線をなすタイプ。各羽根は成鳥に比し幅がやや狭い
【図-14】♂幼鳥	脇・肩羽に虫喰斑（性別識別点）	【図-38】♀成鳥	大雨覆先端（閉翼時）白線をなすタイプ
【図-15】変異個体《B》間性？成鳥		【図-39】♂第1回繁殖羽	大雨覆先端白色羽縁タイプ
【図-16】変異個体《E》♀？成鳥		【図-40】変異個体《A》♀？成鳥	大雨覆ヒドリガモ♂及びアメリカヒドリ♀と同様
【図-17】ヒドリガモ型♂	胸と脇・肩羽に羽色の境界明確	【図-41】交雑個体ヒドリガモ型A	腋羽純白色でアメリカヒドリと同色
【図-18】交雑個体ヒドリ型-A	緑色眼帯顕著な個体は即断禁物、要留意体羽	【図-42】ヒドリガモ♀	腋羽縞模様タイプ
【図-19】交雑個体ヒドリ型-B		【図-43】♂♀成鳥・（時に幼鳥も）	次列風切最内側羽根（S10）外弁白色が三列風切最下側（T1）と重なって1枚に見える
【図-20】交雑個体ヒドリ型-C		【図-44】ヒドリガモ♀	腋羽灰色タイプ
【図-21】アメリカヒドリ型♂	胸～脇～肩羽に羽色の境界なし	【図-45】ヒドリガモ♀	腋羽斑点タイプ
【図-22】交雑個体アメヒ型-A	頭部・首（特に下・前部）の茶褐色に要留意	【図-46】ヒドリガモ・アメリカヒドリ	飛翔時の翼・肩羽。♂成鳥では雨覆が大白斑をなす。♂幼羽～第1回繁殖羽、♀、幼鳥では鱗模様や暗色を呈する
【図-23】交雑個体アメヒ型-B			
【図-24】交雑個体アメヒ型-C			



Chapter 6.2

よりどりみどりヒドリガモ

(羽衣の多様性) — 後編 —

V. 間性

羽衣に異性の特徴を持つ〔個体の〕こと。特に♀が♂の羽衣を持つことが多いようです。日本ではオナガガモ♀の雄化個体が報告されています。外国では、ヒドリガモ♂×ハシビロガモ♀及びアメリカヒドリ♂×オナガガモ♀の交雑個体(いずれも飼育下の個体なので親種判明)が、生後ある期間は♀であったのが2~3年後にほぼ♂の羽衣に変わった例が報告されています。このような♀の雄化個体は老鳥とされていますが、ひょっとしたら交雑個体に生ずることが多いのかも知れません。尚、変異個体の中には雄化〔途中?〕のものがあるかも知れません。

VI. ヒドリガモとアメリカヒドリの交雑個体(すべて♂)

1. 観察羽数・観察地

①観察羽数

私が前記28冬季に見た交雑個体は少なくとも70羽です。中には同一個体〔と思われるもの〕が含まれていたり、これ以外に羽衣の特徴が不明瞭なため或いは観察状況が不良なため判定に至らなかったものもあります。さらに、見過ごしたものもあるかも知れません。ここ数年、私自身や鳥友の観察その他の情報等から、交雑個体の飛来数が増えているように思います。

②観察地

- 1) 昆陽池 (伊丹市) 32羽
 交雑個体に始めて気付いたのは昆陽池です。2001年1月までに32羽観察しています。それ以降は、ヒ

ドリガモの数が減ったことも影響してか、交雑個体は観察しておりません。

- 2) 王子池 (吹田市) 12羽
- 3) 安威川 (茨木市・摂津市) 6羽
- 4) 浜甲子園 (西宮市) 4羽
- 5) 大泉緑地 (堺市) 4羽
- 6) 市場池 (摂津市) 4羽
- 7) 鶴見緑地 (大阪市) 3羽
- 8) 万代池 (大阪市) 2羽
- 9) 万博公園 (吹田市) 2羽
- 10) 蓮間ヶ池 (吹田市) 1羽

これらの観察地のうち、昆陽池は観察回数が多いことから記録羽数も飛びぬけて多く、また、王子池は自宅から至近であり、ほぼ四角形の小さな(水面1ha以下)の農業用池で見通しが良く、飛来数も100羽以下でヒドリガモ以外のカモは殆ど飛来せず、且つ、餌付けされているため観察・撮影が容易です。安威川は観察距離が長く鳥までの距離も遠いため、見落としがあると思います。観察効率(?)が最も良かったのは鶴見緑地で、たった1回(2004年12月)で3羽も確認できました。この時は鳥友からの情報でアメリカヒドリの観察に出かけたのですが、周辺にいた100羽足らずのヒドリガモの中に、簡単に見つかりました。何の情報もなかっただけに、予想外であり望外の記録でした。

2. 識別点.....2つに大別

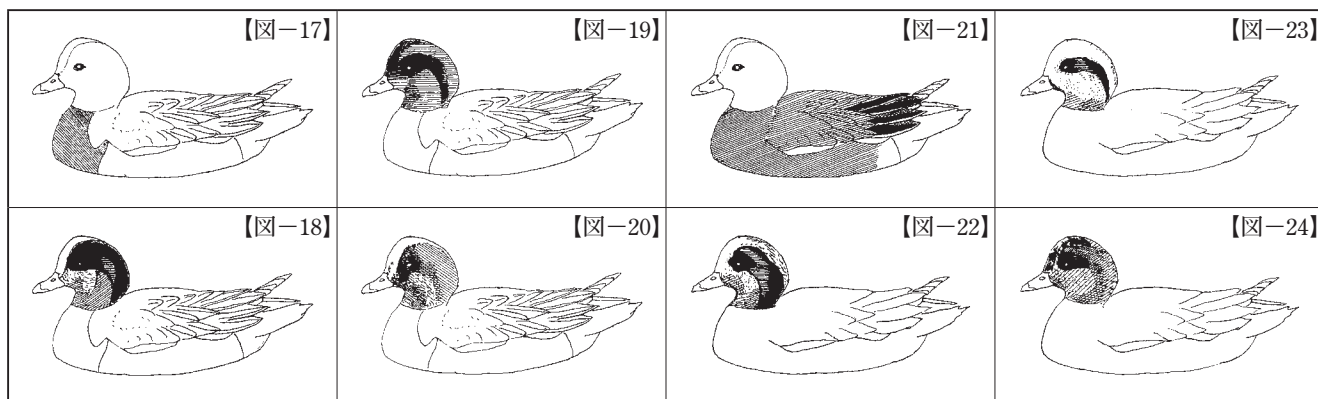
交雑種は、一般的に、親種の特徴の表れ方が多様です。そこで、私は体羽(主に首・胸・脇・肩羽)の色により、2つに大別しています。

①2型大別

A) ヒドリガモ型 (penelope type) <“ヒドリ型”と略称>

- 1) 首が茶褐色、
- 2) 胸(前胸・胸側)がピンク褐色、
- 3) 脇・肩羽は白地に黒色の虫喰斑(全体的に灰色を呈する)。

<注>胸と脇・肩羽の色が異なり境界が明瞭【図-17】



B) アメリカヒドリ型 (americana type)

く“アメヒ型”と略称)

胸・脇・肩羽が、色調や濃さの度合いに多少の変化はあるものの、ほぼ同色のワイン褐色〔うっすらピンクがかかる〕。虫喰斑はさほど目立たないものが多い。

〈注〉胸～脇に色の境界がない【図-21】。

尚、外国の一部の図鑑や雑誌記事でも、2型大別をしていますが、その基準は体羽ではなく目の後方の緑色帯や斑の有無としています。帯や斑の有るものを americana type、無いものを penelope type と称しており、私の分け方とは異なります。

②個体差

交雑個体を見つけるには、まず、ヒドリガモとアメリカヒドリの特徴をきっちりと身に付けておくか、意識することが肝要です。

2型大別した各々の型に当てはめて、私が見たものの中から数例ずつご紹介します。

A) ヒドリガモ型

i) 交雑個体《ヒドリ型-A》【図-18】

- 1) 額から頭頂にかけて幅広く白色、眼帯の緑色は光沢に富み太くて長い帯状となり首の基部辺りまで達する、
- 2) 首は茶褐色だが、喉～頬～首上前部にはクリーム色の地に細かい斑点が密にあり、この部位が全体的に淡色に見える、
- 3) 腋羽は純白色【図-41】、(注：ヒドリガモでは灰色、白地に縞模様や斑点など多様【図-42/44/45】)
- 4) これ以外はヒドリガモと同色。

ii) 交雑個体《ヒドリ型-B》【図-19】

- 1) 《A》によく似るが額から頭頂は(白色ではなく)クリーム色、
- 2) 首はほぼ全体的に茶褐色、
- 3) 緑色眼帯は太くて長く明瞭。

iii) 交雑個体《ヒドリ型-C》【図-20】

- 1) 額は淡い茶褐色だが前頭～頭頂～後頭～後頸にかけて幅広く白っぽい、
- 2) 目の周囲と後部は緑がかかった黒色だが範囲は狭い、
- 3) 首は横から見て後ろ半分は茶褐色、目から下、頬及び首前半分は色が淡く、このため、目の後方から下方へ茶褐色の太い帯状となっている。

iv) 交雑個体《ヒドリ型-D》【図-25】

- 1) 額は淡い茶褐色だが前頭は白色、後頭は白地に黒っぽい斑点が多数ある、
- 2) 目の後方には、さほど大きくないが光沢のある緑色斑があり、その上方及び後方には黒色斑点が多数ある、
- 3) これ以外はヒドリガモと同色。

v) 交雑個体《ヒドリ型-E》【図-26】

- 1) 前頭部はうっすらと茶褐色味を帯び、頭頂は白っぽい、
- 2) 眼帯が光沢のある緑色、
- 3) 脇前部がやや斑状に淡ピンク褐色、
- 4) その他はヒドリガモとほぼ同色。

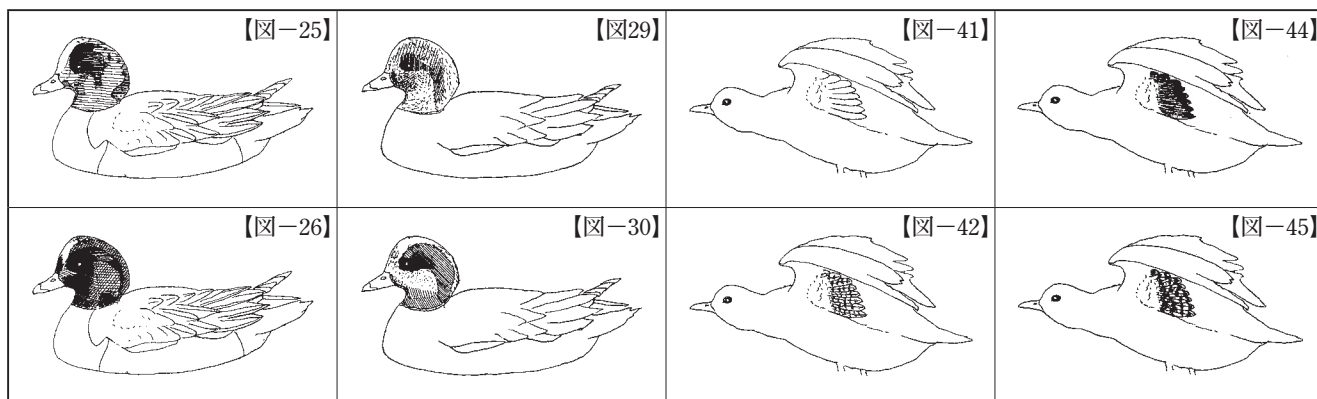
B) アメリカヒドリ型

i) 交雑個体《アメヒ型-A》【図-22】

- 1) ヒドリガモ型《A》に似るが、胸はピンクがかかった褐色、脇・肩羽は明瞭な虫喰斑のある灰色にピンク褐色を帯びている、
- 2) 首の茶褐色は全般的に淡い、
- 3) 緑色眼帯は非常に幅広く極めて明瞭、
- 4) 頭頂から後頭にかけて黒色の縦斑や斑点が多数ある。

ii) 交雑個体《アメヒ型-B》【図-23】

- 1) 額に淡い茶褐色味があるが前頭・頭頂・後頭は白色、
- 2) 眼帯は長く緑色の光沢あり明瞭、
- 3) 目の下方部、頬、首上半分はクリーム色で黒っぽい小斑点がある、
- 4) 首の基部及び後頭は茶褐色、



5) 胸～脇～肩羽はほぼ一様にピンク褐色。
当初、この個体はアメリカヒドリとされていましたが、喉、首基部、後頸が茶褐色であること。さらに、腋羽が純白色ではなく羽軸の周辺と羽端が灰色である【図-44】ことも判明(注:石井正春さん撮影<1996/2/23>)。これらのことから交雑個体と判断されました。

iii) 交雑個体《アメヒ型-C》【図-24】

- 1) 額～頭頂はクリーム色、
- 2) 目の周囲及び眼帯は黒っぽく緑色は殆ど無い、
- 3) 頬は淡い茶褐色、
- 4) 首は上部及び前方がやや淡色でこれ以外は濃い茶褐色、
- 5) 胸前面は淡色だが胸側・脇・肩羽は非常に濃いピンク褐色で、虫喰斑は肩羽には不明瞭ながら有るが脇には無い。

iv) 交雑個体《アメヒ型-D》【図-30】

[最もよく見られる羽色パターン。バリエーションが多い]

- 1) 額・前頭・頭頂は白色或いは白っぽいクリーム色、
- 2) 目の周囲及び後方は黒っぽく、個体によりわずかに緑色がある、
- 3) 頭部及び首は濃淡茶褐色のツートンカラー。淡色部は目のすぐ下、頬、首前部で、個体によりかなり白っぽく、濃色部は目の後方の頭側、後頭さらに首の後半と基部。横から見ると、目から下、首前半分が淡色、頭部後方、首後半分が濃色。

v) 交雑個体《アメヒ型-E》【図-29】

- 1) 前頭・頭頂に白色味が乏しく(淡いクリーム色)、
- 2) 頭部、首は茶褐色だがツートンカラーのコントラストは弱い、
- 3) 胸～脇～肩羽はピンク褐色で部分的に茶褐色や灰色が混じる。

VII. おわりに

このように、ヒドリガモの羽衣は、変異や交雑を含め、極めて多様です。ここに取り上げたのは、私の観察の一部に過ぎません。観察洩れの羽衣も少なくないと思います。この拙稿が、ヒドリガモの羽衣の多様性を観察し楽しむための一助となれば、嬉しい次第です。また、私が観察した交雑個体は全て♂(成鳥繁殖羽の他、換羽中や若い個体も)ですが、交雑個体は全て羽色が異なると言っても過言ではありません。交雑個体の♀は未確認で、今後の課題です。このような多様性が面白くて、観察が楽しくなります。ヒドリガモ以外のカモでも多少の多様

性はあります。ヒドリガモを例にして、普通種のカモをいま少し細かく観察されることをお奨めします。

尚、今回は拙イラストを多用し誌面を大幅に占用してしまいましたが、それは、文章だけでは分りにくいと思われるところが少なからずあり、特にカモ観察の経験の深からぬウォッチャーの便のために敢えて採った手段です。この点ご理解のほどお願いします。

《年齢と性別識別ポイントのまとめ》及び《イラスト略説》は前号と後掲別記をご参照下さい。

(2006/09/15記)

**** 《年齢と性別識別ポイントのまとめ》 ****

A. ヒドリガモ

①雨覆

<1> 白色……………♂成鳥(注:白地に淡灰褐色の斑があれば♂第2回冬羽・第2回夏羽)

<2> 鱗模様明瞭……………♀成鳥

<3> 鱗模様不明瞭……………幼鳥だが性別判定不可
(虫喰斑の有無などで判定)

<4> 鱗模様不明瞭(大雨覆は白・暗色・白/黒色等)
……………♂第1回繁殖羽

②三列風切(外弁)

<1> 黒色……………♂成鳥・第2回冬羽・第2回夏羽

<2> (暗)褐色……………♀成鳥・(幼鳥・第1回冬羽・第1回夏羽は雨覆等と合わせて判定)

<3> 淡褐色……………幼鳥・第1回冬羽・第1回夏羽

B. 変異個体

正常ヒドリガモの性別・年齢別特徴と比較して判断する。主に見る部位は:

①雨覆

②頭部～首～胸～脇～肩羽

C. 交雑個体

ヒドリガモとアメリカヒドリ両種の特徴を基本として、主に次の部位を見る。

①頭部(緑色の眼帯のみでの即断は不十分)

②首(注:頸側・前頸とも見る)

③胸～胸～肩羽

④腋羽(注:翼を上げた時に素早く見る)

⑤鳴き声(♂)…a)ヒドリガモ:「ピューー」

……b)アメリカヒドリ:「ピヤッ、ピヤッ」

尚、アメリカヒドリとヒドリガモの識別ポイントについては拙稿『むくどり通信』No.178(2005/7-8)をご参照下さい。



カラスは換羽の要哉

I. はじめに

私の住まいは万博公園の近くです。大きなマンションで敷地内や周辺には樹木が多く、スズメ、シジュウカラ、カワラヒワ(?)、ムクドリ、ツバメ、セグロセキレイの他カラス2種も繁殖します。ほど遠くないところにカラスのねぐらもあり、自宅のベランダからカラスを見聞きしない日はまずありません。

II. 地上の羽根

カラスは住民から嫌われ、年によっては巣が管理人に壊されますが、順調に繁殖して電柱の上で甘ったるい声で、親鳥に餌をねだる巣立ち雛が見られることもあります。

私はカラスの存在は、勿論苦になりません。特に換羽期になると楽しくなります。それは、抜け落ちた羽根が敷地内や周辺で少なからず落ちているからです。サラリーマン時代の出勤・帰宅の途次や自宅周辺を出歩く時は、羽根を見つけると、道からそれでも拾い上げて査定しました。今でも少しはやっています。

羽根は万博公園でも数多く拾えますが、住宅地に落ちているものは、脱羽当日かほんの2~3日前のものが多いようで、脱羽日の推定の精度が高く、その分判断の確度が上がります。特に敷地内は毎日の清掃で処分されますので、ほぼ当日か前日の脱羽のものが大半だと思われます。

III. 頭上の換羽

概ね5月に入ると換羽が始まります。戸外に出ると、羽根が落ちていないかと知らず知らず探している自分に気がきます。

換羽の時期の初め頃に拾うのはP1(初列風切の内側第1羽根)です。この位置から外側に向かってP10(最外側の羽根)まで4ヶ月程かけて生え換わります。この頃のP1は褐色味のかかなり強い色です。これは前年生れの幼羽根に違いありません。若い(第2暦年)個体は大半が繁殖しないと思われます。このような個体は換羽の開始時期が、繁殖するものより、2~3週間早いようです。

この時期、頭上を飛び交うカラスには、広げた翼の中心ほどに隙間のあるものが見られます。こんな時は、手に持ったP1と見比べながら内心にっこりします。《地上

と頭上が合ってるなあ》

換羽はどんどん進みます。早い個体は8月中に翼も尾も生え揃います。この頃になっても未だ換羽中(初列風切外側のP9/P10)の個体は繁殖した♀の可能性が高いと思います。通常、♀の方が換羽の開始が遅い傾向があります。

IV. 換羽の進行

日本のカラスについては資料がなく、止む無く外国(ヨーロッパ)のハシボソガラスを参考にしますと、換羽の順は:

- *初列風切は内側(P1)から外側(P10)に向かって、
- *次列風切は外側(S1)から内側(S6)に向かって、
- *三列風切は5枚あり外側=下側の2枚目からT2-3-1-4-5の順に、
- *尾は中央から左右外側に向かって進行するとのことです。

このように先ずP1から開始し、初列風切のほぼ半数が換羽した頃に、次列風切、三列風切、尾が少し間隔を置いて換羽を開始するとのことです。

私の観察でも、極めておおよそですが、上記のようなことが窺えます。7月から8月に拾うのは、初列風切の外側の羽根で黒味の強いものが増えてきます。これは成鳥の羽根でしょうが、1年間太陽に晒されて使ったものですから多少褐色味のあるものもあります。また、次列風切羽根と尾羽根もよく拾います。羽根を拾っては頭上のカラスを見て換羽の状態(進み具合)と照合するのは楽しいことです。

V. 探鳥会でカラスの換羽を

上記は私が長年観察してきたことを記憶に基づいて書いた大まかなものです。本来なら少なくとも数年間羽根を収集し、同時期に換羽中のカラスを多数撮影してその写真などデータをきっちり揃えて、精査、分析したいところですが、残念ながらそれは出来ておりません。でも、このような観察もバードウォッチングの一分野として、面白く意味のあることだと思っています。

カラスは大型の鳥であり換羽の状態は観察しやすく、拾得した羽根も判定も難しくありません。夏場は鳥が少ないことから、一部の定例探鳥会は休会ですが、この時期はカラスを対象に普段の探鳥会ではなかなかしづらい換羽の観察をじっくりしたいものです。暑さは干潟や埋立地でのシギ・チドリの観察の方がきついです。夏場のカラスは換羽の観察に最適です。カラスを見る目が俄然変わり、カラスの存在価値がうんと上がること請け合いです。(2006/09/02記)

表紙の写真 チュウヒ
撮影: 納屋 仁



I. はじめに

トポグラフィ (topography) とは地形、地表形態、地形図などのことです。つまり、土地表面の形や状態 [を表す図] のことです。鳥については辞書に訳語が出ていませんが、体の表面の各部位 [を表す図] のことです。日本語の定訳語がないようなので、私は取り敢えず「(鳥) 体表部位図」(以下「体表図」と略記) と言っています。図鑑に出ている「各部の名称」のことです。しかし、図鑑のあの図をきっちりと身に付けている人は、意外と少ないようです。確かに、ひとつの図に各部位の名称が数多く書かれていて憶えづらいと思います。私は自分なりに工夫をして身に付けてきました。

「体表図」が身に付いていないと、図鑑の解説や雑誌の記述を読んでも、正確には理解できません。また、探鳥会などでリーダーから「三列風切を見て下さい」と言われても分かりません。こんな時、私はやむなく説明文のような言葉で解説しますが、どうしても長くなりぐずぐずしていると、鳥が飛び去ってしまうことがあります。同じような経験を他のリーダーからお聞きしたことがあります。

そこで、今回は各部位をひとつずつ図示して、簡単な解説を付けてみたいと思います。多少なりとも解りやすく、憶えやすくなるのではないかという私の試案です。

II. 翼よ! それが鳥のキーだ

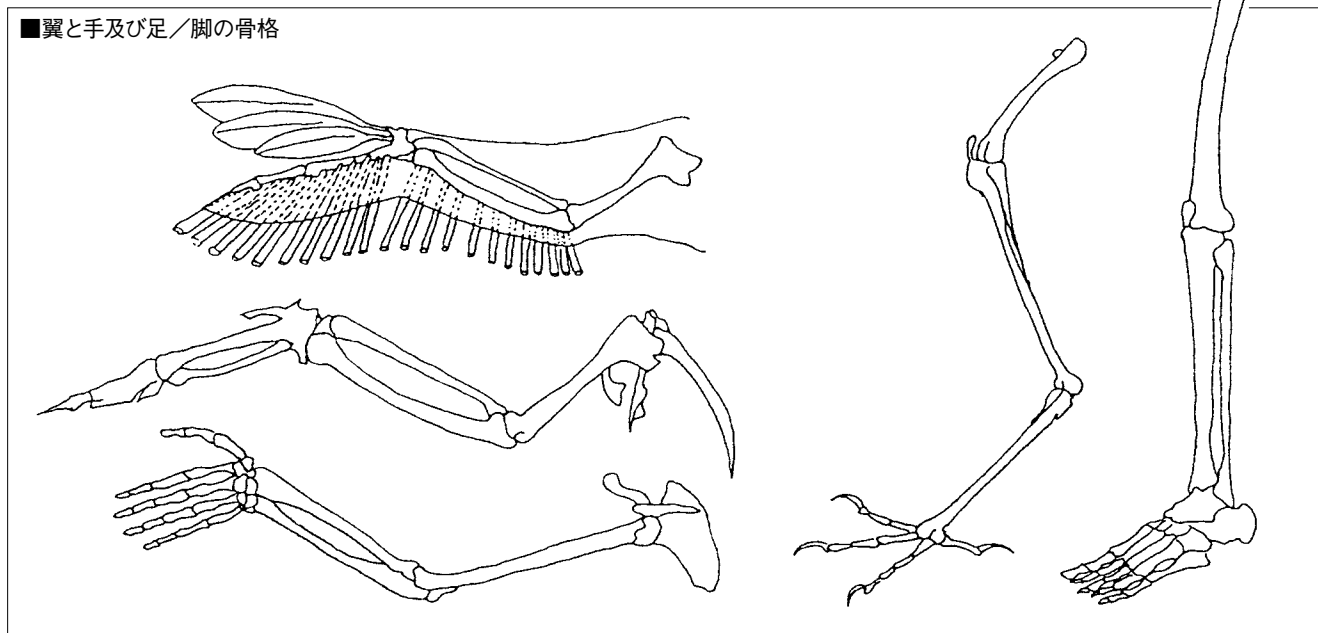
鳥の体表部位には多くの名称が付けられています。でも、翼と尾以外は頭、首、目、背、足、口 (嘴)、喉など、基本的には人間と同じです。同じでなくても見ればすぐに分るものもあります。これらは憶える必要がありません。少数ながら人間には使わない名称や同音異義の名称があります。例えば、腮 (くさい) = 「あご」、目先、上尾筒、下尾筒などと、それに脇と腋。また、模様や特殊な部位については独特の名称が使われます。例えば、過眼線、頬線、顎線、額板、蠟膜など。これらは開いたり閉じたりしないので図鑑を見れば分りますし、図鑑を見ながら野外で実物を観察することもできます。結局、厄介なのは翼だけです。翼は構成されている部分が多い上に、閉じた時と広げた時にどの部位がどの位置にあるのかが分りにくいのです。

このような訳で、本稿の対象はほとんど翼だけです。翼の骨格は人間の腕と手とほぼ同じです (別掲の図をご覧下さい)。どの骨の部分にどの羽根が付着しているかが分れば、翼の動きは、自分の腕と手を動かせば理解しやすいです。

翼は形や羽根の枚数が鳥のグループ (主に「目」単位) により違いますが、その構成はどの種の鳥でも、基本的には同じです。少し違うのは、閉翼時に見える (露呈する) 部分です。そこで、普通に見られる鳥の中から代表として、以下の5つのグループを対象とすることにしました。
 ①スズメ目 ②シギ・チドリ類 ③カモメ類 ④カモ類 ⑤ハト類

★以下、次号に続く

■翼と手及び足/脚の骨格





Chapter 8.1

トボグラフィ ア・ラ・カルト 《その1》初列風切

①初列風切 (primaries = P と略記)

推力を生じる風切。人間の手にあたるところ(腕掌骨<中手骨>と指骨)に付着。

④スズメ目

いわゆる小鳥類ですが、カラスの仲間のような大きな鳥も含まれます。羽根の数は10枚。最外側の羽根(P10)は非常に小さく(短く)、スズメでは最長のP7/8が65mmに対してP10は14mmです。翼を閉じると各羽根の外縁が線状に並んで見えます。先端は種によって^{まちまち}区々ですが、5~6枚が突き出る様に露呈します。これは初列突出(Primary Projection = PP と略記)と呼ばれます。PPの出かたや翼を広げた時の各羽根の長さの順(翼式)が種同定に使われること(特にムシクイ類)があります。尚、セキレイ類、ヒバリ類などでは三列風切が長い為、閉翼時に初列風切が覆われてしまい、PPが全く或いは殆ど見えなくなります。

⑤シギ・チドリ類

羽根の数は11枚ですが最外側の羽根(P11)は最長(P9或いはP10)の概ね1/4~1/5の長さで、通常は見えません。閉翼時、羽縁は雨覆に覆われて見えず、先端部が数枚見えるだけです。翼の長い種(例:ヒメウズラシギやアメリカムナグロ)ではPPが尾より顕著に突出し、識別点のひとつとなっています。

⑥カモメ類

羽根の数はシギ・チドリ類と同様11枚です。P11は短小で通常は見ませんが、先端部のほか羽縁もかなりの部分が見えます。翼を少し緩めると先端部がP1(最内側の羽根)まで見えることがあり、パターン(白黒の模様など)が確認でき、種の識別や換羽状態の観察に役立ちます。

⑦カモ類

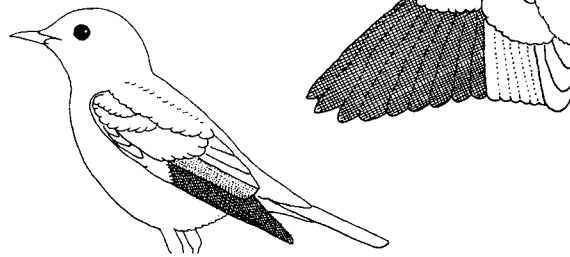
羽根の数は11枚ですが、P11は短小なので通常は見えません。閉翼時先端部が数枚突き出ているがよく見えますが、羽縁は三列風切に覆われていることが多く、通常は見えません。尚、マガモで先端部の露出が極端に短い個体は(翼が短い証拠であり)アヒルに違いありません。ただし、換羽期で脱羽或いは伸長中の個体には注意が必要です。

⑧ハト類

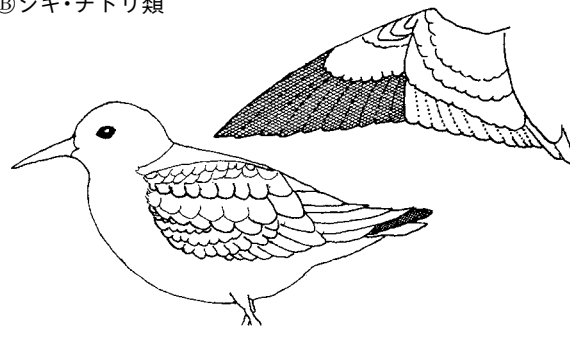
羽根の数は10枚。最外側のP10も長くてP9と大差がありません。閉翼時、先端部も羽縁もよく見えます。

★以下、次号に続く

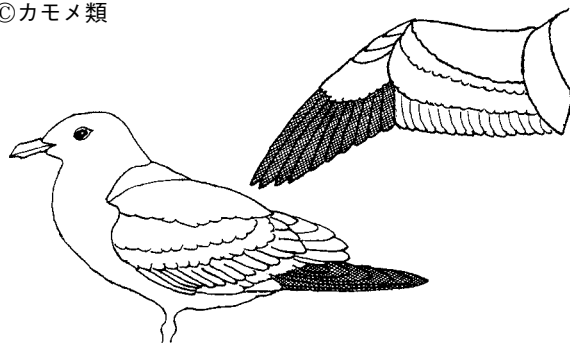
④スズメ目



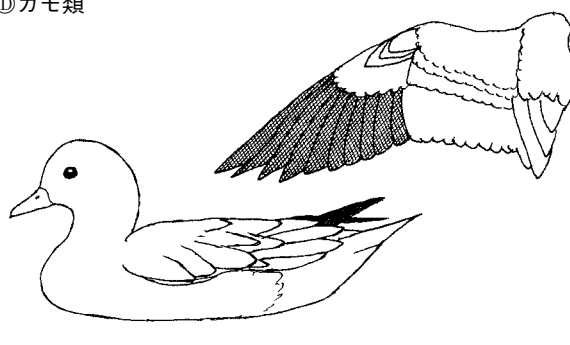
⑤シギ・チドリ類



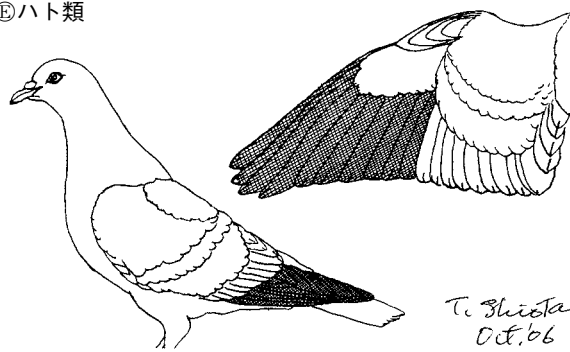
⑥カモメ類



⑦カモ類



⑧ハト類



T. Shiojiri
Oct. 06



Chapter 8.2

トボグラフィ
ア・ラ・カルト

《その2》次列風切

②次列風切 (secondaries = Sと略記)

揚力を生じる風切。人間の下膊にあたる場所(尺骨)に付着。

①スズメ目

羽根の数は6枚。閉翼時は羽根の先端部や表面は三列風切の下に畳み込まれて見えないが、羽縁が線状に並んで見えます。ルリビタキ(♂)やコルリ(♂)のように鮮やかな羽色の鳥では、若い個体は羽縁が褐色ですが、成長して換羽を重ねると青色が生じるので、年齢識別に役立ちます。

②シギ・チドリ類

羽根の数は種や個体により10枚から10数枚。閉翼時は大雨覆や三列風切に覆われて見えません。種によっては大部分が白色であったり、羽端の白斑が連なって線状になるものもあります。

③カモメ類

羽根の数は種によって区々だが^{まちまち}10数枚のものが多い。閉翼時も大雨覆の下に先端部が見えます。見える程度は翼の保持具合により差があります。個体差や年齢差によることもあるかも知れません。

④カモ類

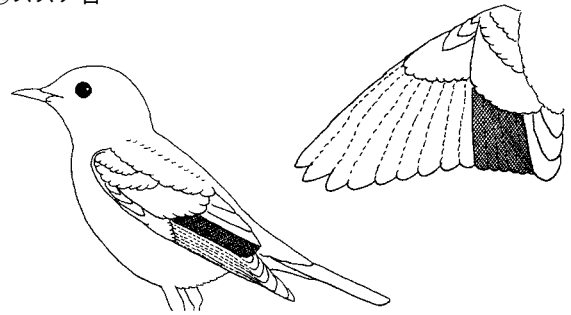
羽根の数は種により区々で概ね10~12枚。閉翼時は三列風切や脇羽根に覆われて見えないが、翼を少し緩めると部分的に見えます。各種特有の色やパターンがあり、「翼鏡」と呼ばれます。例えば、マガモでは青紫色で先端が白色、ヒドリガモ、コガモ、ハシビロガモ等では緑色、オカヨシガモでは内側(胴体側)の3、4枚が白色。いずれも性別、年齢により羽色に差があります。スズガモ属(スズガモ、キンクロハジロ、アカハジロ、ホシハジロ等)では白色か淡灰色で、いずれも飛翔時に初列雨覆と共に太い翼帯となりよく目立ちます。

⑤ハト類

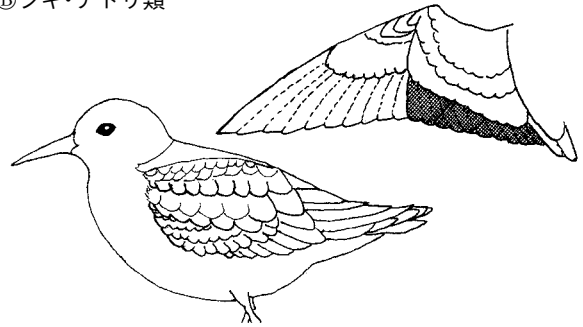
羽根の数は10枚前後。閉翼時もかなりの範囲が見えます。ドバトで原種(カワラバト)の羽衣の個体では、内側数枚の先端部の黒色が三列風切の黒色部と連なり黒帯となります。尚、大雨覆にも黒帯があり、翼に黒帯が2本見えます。

★以下、次号に続く

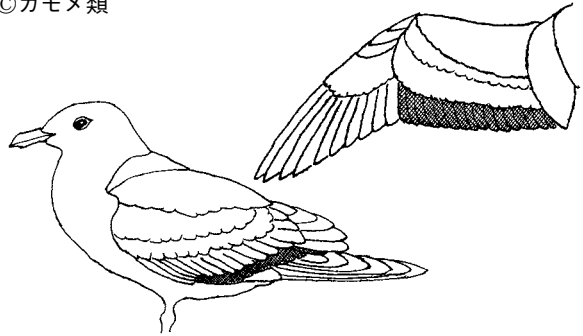
①スズメ目



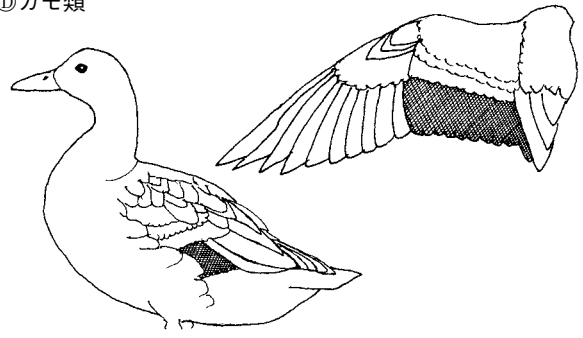
②シギ・チドリ類



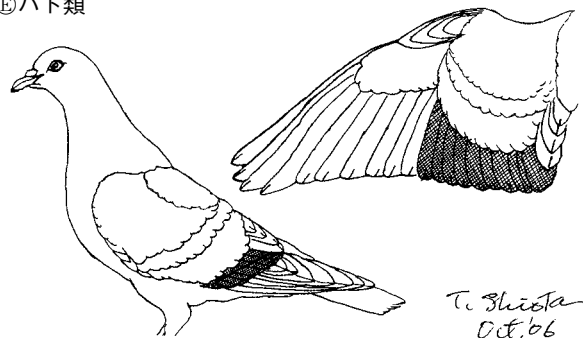
③カモメ類



④カモ類



⑤ハト類



T. Blüster
Oct. 06



Chapter 8.3

トボグラフィ ア・ラ・カルト 《その3》三列風切

③三列風切 (tertiaries/tertiaries = Tと略記)

翼の基部を強固にするための風切。人間の肘にあたるところに、縦に重なって付着。

④スズメ目

羽根の数は殆どの種で3枚。閉翼時にもよく見える種が多く、コサメビタキ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオジロなど、白色や淡褐色の羽縁がよく目立ちます。セキレイ類やヒバリ類などでは、三列風切(3枚のうち特に下の羽根)が長く、閉翼時に初列風切のほぼ先端まで達して初列風切を覆います。尚、先端が磨耗している個体では初列風切の先端部がかなり見えることがあります。

⑤シギ・チドリ類

羽根の数は4枚。長くて先端がほぼ尖っているため初列風切と見間違えるかも知れませんが、羽色が異なる(初列風切より淡い種が多い)ほか、淡色の羽縁や斑点などがあり、よく見ると区別がつきます。

⑥カモメ類

羽根の数は5枚。閉翼時には、羽根の先端部が成鳥では幅広く白色、若い個体では暗色の羽縁がありよく目立ちます。翼を広げると肩羽に覆われるため飛行時には殆ど見えなくなります。

⑦カモ類

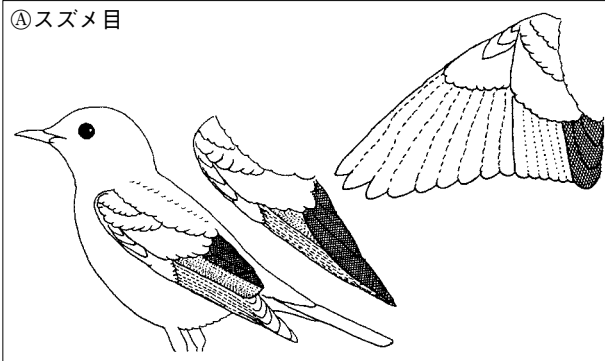
羽根の数は4枚。種によって独特の形状をしています。ヒドリガモ、オカヨシガモ、コガモ等ではほぼ真直ぐのやや細長い形ですが、マガモやカルガモでは幅(とくに外弁)が非常に広く、カルガモには幅広の白縁があり非常によく目立ち、尾や腰に見間違えられることがあります。また、ヨシガモ(♂)では非常に長く、鎌のように湾曲し下方に垂れ下がるように見えます。オシドリ(♂)では銀杏羽根です。

⑧ハト類

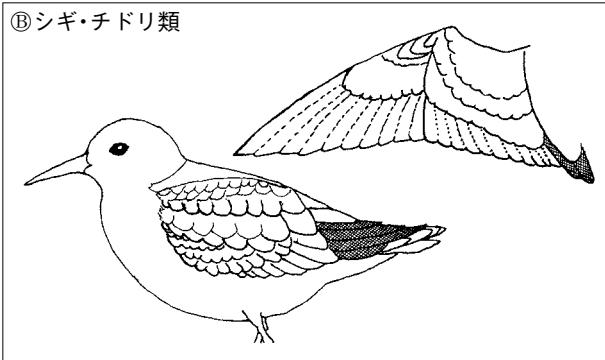
羽根の数は4枚。特徴のある種は少ないですが、キジバトではやや幅広の羽縁がありよく目立ちます。ドバト(カワラバトと同じ羽衣の個体)では各羽根に黒色部があり、次列風切の黒色部と連なり黒帯をなします。

★以下、次号に続く

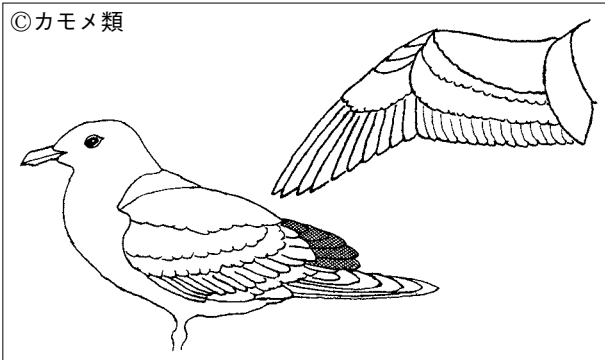
④スズメ目



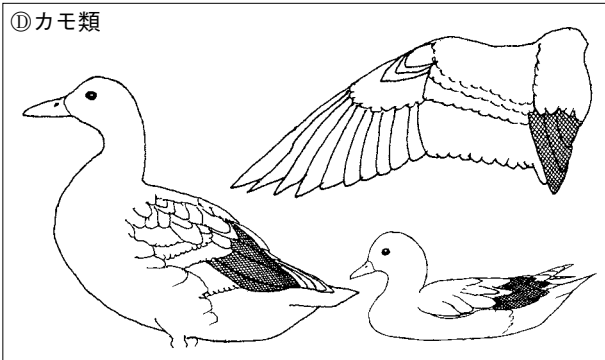
⑤シギ・チドリ類



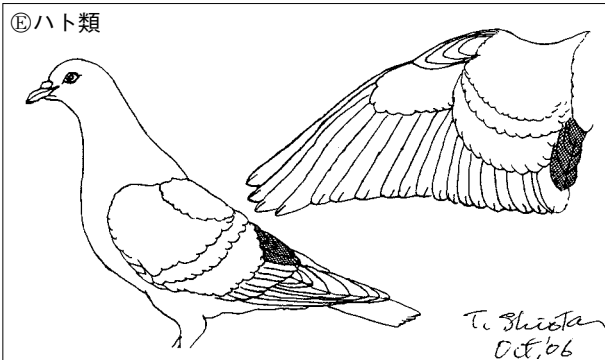
⑥カモメ類



⑦カモ類



⑧ハト類



T. Blüster
Oct. 06



Chapter 8.4

トボグラフィ ア・ラ・カルト 《その4》大雨覆

④大雨覆 (<secondary> greater coverts = GC と略記)
次列風切の基部を覆う羽根。「次列大雨覆」とも呼ばれる。

①スズメ目

次列風切と三列風切の基部を覆う羽根で数は10枚。閉翼時には内側の1~2枚が見えないことがあります。各羽根の先端に白色やバフ色の斑点があるものが少なからずあります。ムシクイ類では斑点が並んで線状になり翼帯と呼ばれます。カケスでは外側5枚がブルー地に黒線のある羽根です。

大雨覆について、私が最も関心があるのは、特に大型ツグミ類では年齢識別の主なポイントとなることです。幼羽根には先端に淡色の斑点があり、生まれた年の夏から秋にかけて、内側(胴体側)の3、4枚が換羽で成鳥とよく似た羽根に生え換わりますが、この羽根は色が鮮やかで先端には斑点がなく、外側の未換羽の幼羽根より長く、全体として2世代の羽根が並んでいるため差が明瞭であり、このような個体は第1回冬羽と判断できます。ヒタキ類でも同様の判断ができます。また、ハクセキレイでは、成鳥では羽根は白色ですが幼羽根は先端の幅広い白色以外は黒っぽいため年齢識別のポイントとなります。さらに、シベリアハクセキレイをふくめた5亜種では成鳥でも大雨覆が黒色(羽縁のみ白色)で亜種の識別にも有用です。あまり注目されていないようですが、観察すると面白い部位です。

②シギ・チドリ類

内側の3、4枚は他の羽根より大きくてよく見えます。幼羽根には白っぽい羽縁のあるものが多く、冬羽では成鳥との区別に役立ちます。

③カモメ類

閉翼時でも広く露呈しよく見えます。年齢識別にも役立ちます。

④カモ類

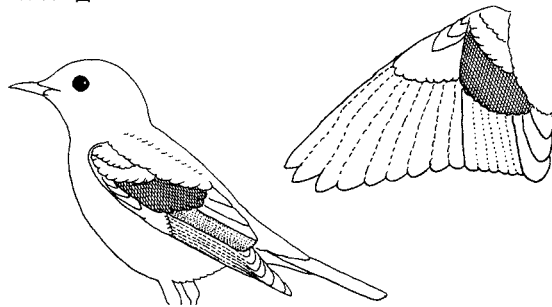
閉翼時には見えないので、翼を緩めるか伸びをした時にすかさず観察すると見えます。種、年齢、性別により色やパターンが異なり、面白い部位です。

⑤ハト類

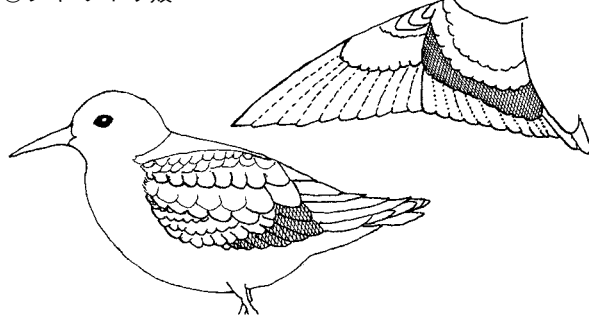
閉翼時でも広い範囲が見えます。ドバト(カワラバト)では各羽根の外弁の中ほどに黒色部があり黒帯となります。〔③三列風切の項参照〕

★以下、次号に続く

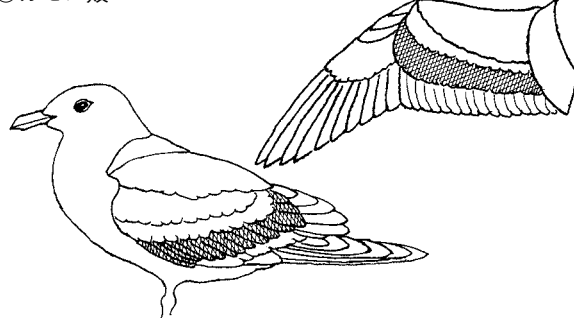
①スズメ目



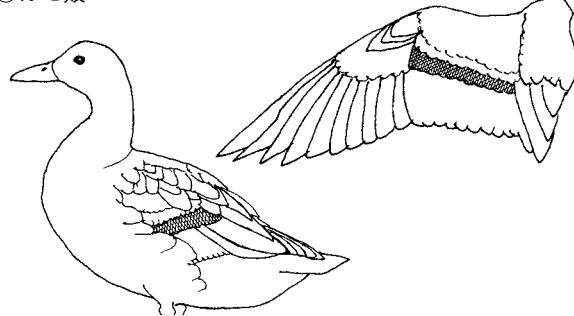
②シギ・チドリ類



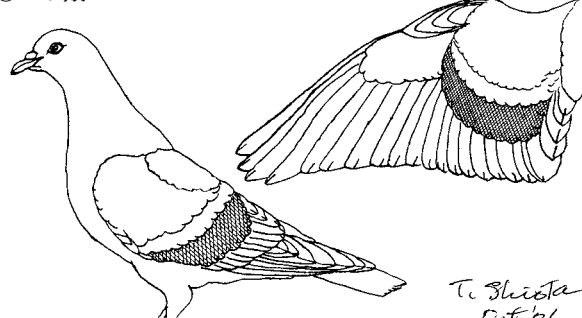
③カモメ類



④カモ類



⑤ハト類



T. Blüster
Oct. 06



Chapter 8.5

トボグラフィ ア・ラ・カルト 《その5》 中雨覆

⑤中雨覆 (median coverts = MC と略記)

大雨覆の基部を覆う1列の羽根。

④スズメ目

小さな部位 (8~9枚の羽根) ですが閉翼時でも見えます。セキレイ類では黒色 (例: イワミセキレイ) 或いは白色 (例: キガシラセキレイ、シマアオジ) などよく目に付きます。タヒバリ類では軸斑の形の違いが識別点になるものもあります。また、羽根の先端が白色のものは大雨覆と合わせて2本の翼帯をなすものもあります (例: ムシクイ類、スズメ、ノジコ)。アトリでは橙色で先端が白色です。このように、意外と面白くて役に立つ観察ポイントです。

③シギ・チドリ類

最大のポイントは、多くの種で幼鳥は秋~冬に外側のみを換羽し内側の数枚は幼羽根のまま (つまり2世代の羽根で構成) 冬を過ごすため、第1回冬羽と識別出来ることです。野外では見て取りにくいですが、もし見れば、冬季なら羽縁があり、春季なら磨耗の度合いが強いことなどから年齢識別に役立ちます。

《注: スズメ目では「大雨覆」の「内側」のみ換羽》

②カモメ類

比較的幅の狭い部位ですが、閉翼時にもよく見えて年齢識別に役に立ちます。

①カモ類

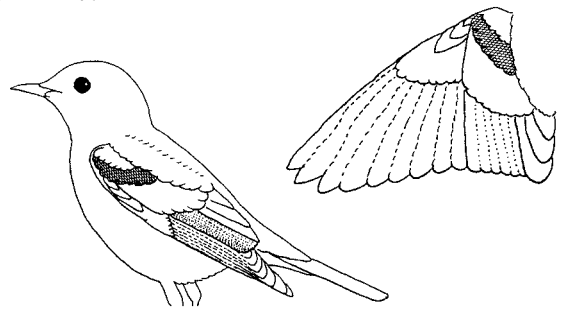
ヒドリガモ、ウミアイサ、カワアイサでは白色、ハシビロガモではブルーで性別や年齢の識別に有用です。他の種でも性別や年齢により多少の差があり、観察する価値は十分あります。

⑥ハト類

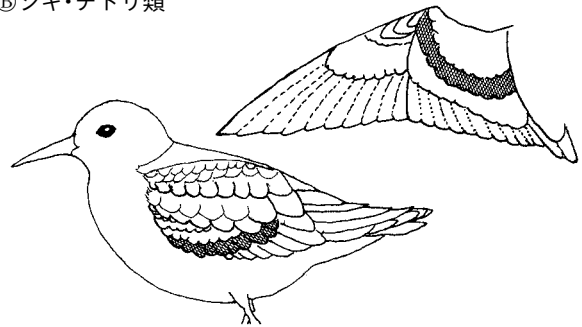
閉翼時にも露呈します。種により羽色に性差があるものの、他の部位とほぼ一樣に同系統の羽色で見て取りにくい部位です。ただ、キジバトでは明瞭な羽縁があり比較的容易に見て取れます。

★以下、次号に続く

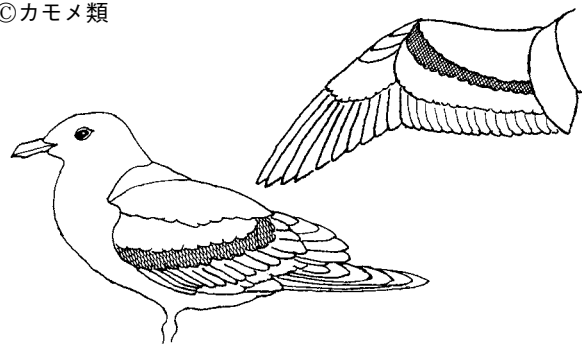
④スズメ目



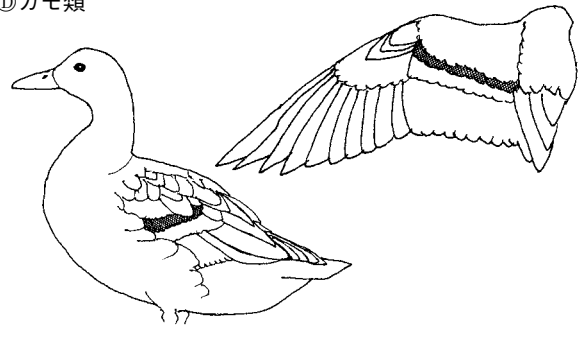
③シギ・チドリ類



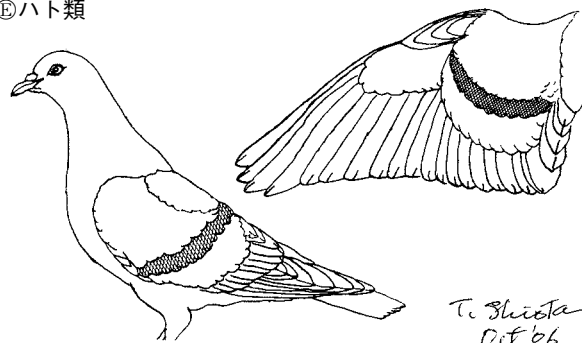
②カモメ類



①カモ類



⑥ハト類



T. Blüster
Oct. '06



Chapter 8.6

トボグラフィ ア・ラ・カルト 《その6》 小 雨 覆

⑥小雨覆 (lesser coverts = LC と略記)

中雨覆の基部から翼の前縁を覆う数列の小さな羽根。特に翼前縁部の極小の羽根が集まる部分を「前縁雨覆」と呼ぶことがある。

④スズメ目：肩羽に覆われて小さな部分しか見えず、観察には殆ど役に立ちません。

⑧シギ・チドリ類：閉翼時でも部分的に見えますが、観察には殆ど役に立ちません。

⑨カモメ類：幼羽根が遅くまで（春になっても）残り、年齢識別に有用です。

⑩カモ類：中雨覆と同様、羽色に差があり種によっては性別や年齢識別の役に立ちます。

⑪ハト類：中雨覆と同様、種により羽色に性差がありますが、あまり役に立ちません。

★以下、次号に続く



塩田 猛さん

塩田さんは、今から20年以上前に、「日本野鳥の会野鳥記録委員会」の委員になられ、会員から報告のあった珍しい種や初記録の種などについて、内容を検討され、結果をStrixで発表するという大変時間のかかる仕事をボランティアで7年間にわたり担当されていました。

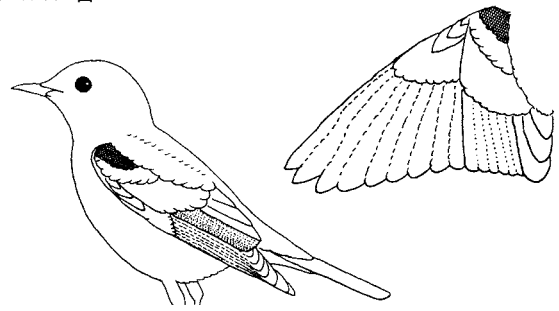
当時、一緒に記録委員会の委員をされていた叶内拓哉さんが、この度、興和の探鳥会の講師として来阪されたことから、お二人の久しぶりの再会となりました。

叶内さんは鳥合わせの時に、探鳥会の記録は重要。たとえベテランが見たものでも一人しか見ていないものは記録とはしないと話されました。その後、塩田さんが、挨拶をされ、記録委員会での苦労話を披露されるとともに、現在、日本野鳥の会には当時の野鳥録委員会のような会員の観察記録を集約し、検討する組織がないことから、貴重な記録が発表されずに埋没してしまっていることが残念であると話されました。

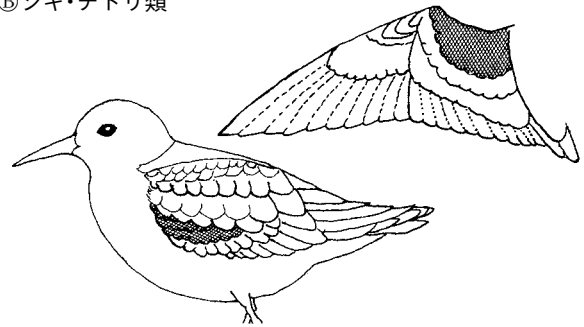
鳥の世界の変化を見ていくうえで、普段の野鳥観察の記録が重要であるということを改めて教えられました。

(広報G)

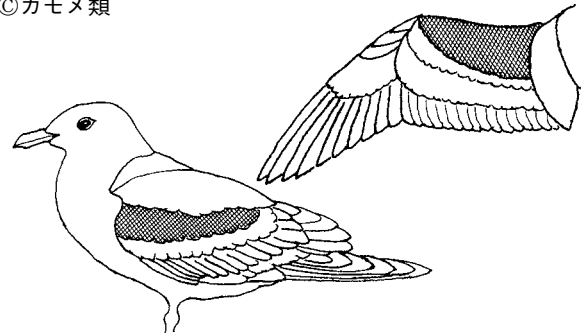
④スズメ目



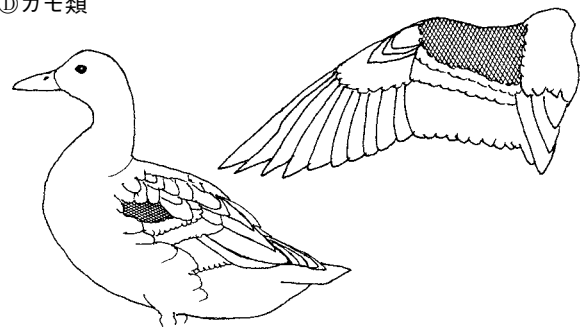
⑧シギ・チドリ類



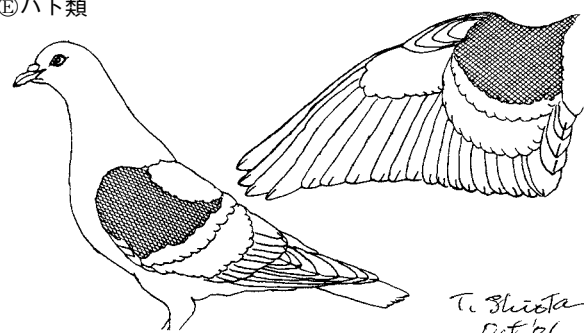
⑨カモメ類



⑩カモ類



⑪ハト類



T. Shiota
Oct. 06



Chapter 8.7

トボグラフィ
ア・ラ・カルト

《その7》初列雨覆

⑦初列雨覆 (primary coverts = PC と略記)

初列風切の基部を覆う羽根。羽弁は頑丈、羽柄は長めで強固。

①スズメ目

小さくて、特に閉翼時は見づらい部位ですが、先端に白点があったり (例：ノビタキの幼羽根)、色やパターンが年齢と性別で異なる (例：ツグミ) など、意外と役に立ちます。また、初列風切最外側の短小羽根 (P10) との長さの違いで種の同定にも使われ、ムシクイ類の落鳥を拾得した時などに有用です。カケスでは全ての羽根(9枚)がブルーで黒線があります。

②シギ・チドリ類

閉翼時には見えません。先端に白っぽい縁があるものもありますが、それ以外はほぼ一様色の種が多く《注：他の雨覆には斑点など模様のあるものが多い》、羽づくろいで翼を伸ばした時や飛翔時に暗色部として見えますが、観察にはあまり有用ではありません。

③カモメ類

閉翼時には小範囲が見える程度です。開翼時も初列風切とほぼ同色なので見えにくく、識別には殆ど役に立ちません。

④カモ類

閉翼時には見えません。開翼時は、初列風切が白色のスズガモ属では見やすいですが、他の多くの種では初列風切とほぼ同色なので見えにくく、識別点にはなりません。

⑤ハト類

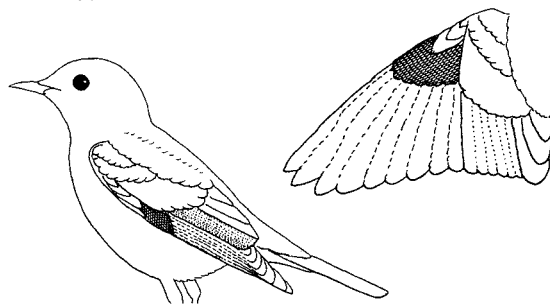
閉翼時には見えません。開翼時は初列風切とほぼ同色で目立たず、識別ポイントとはなりません。

★以下、次号に続く

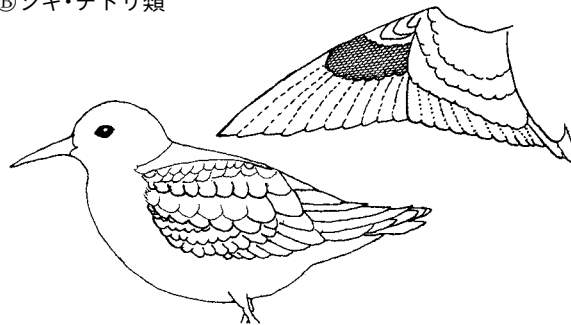
表紙の写真 ホオアカ 奈良県曽爾高原 2008年7月
撮影：上村 賢

低山から山地の丈の高い草原から林縁にかけて営巣。近年、近畿地方での確実な繁殖地は曽爾高原だけであり貴重な生息地となっている。近畿レッドデータブック準絶滅危惧種。冬は府内の農耕地や河川敷の草原などで見られる。

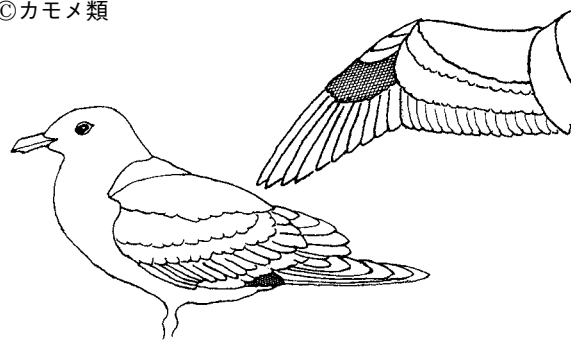
①スズメ目



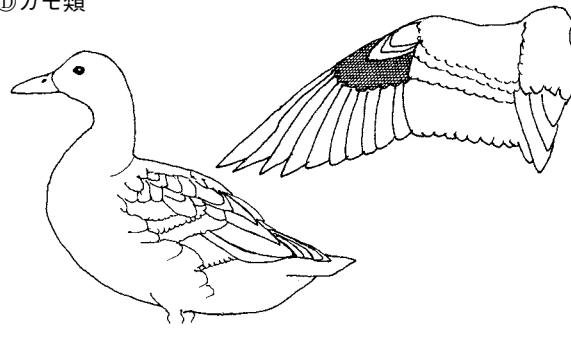
②シギ・チドリ類



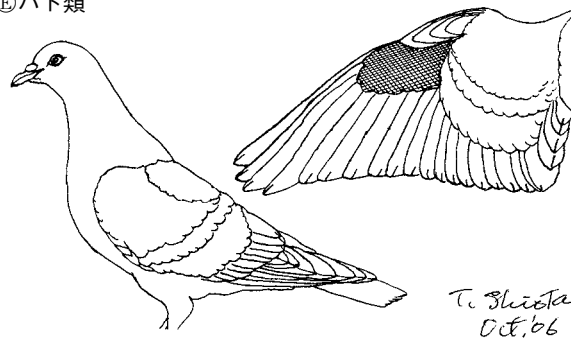
③カモメ類



④カモ類



⑤ハト類



T. Blüthner
Oct. 06



Chapter 8.8

トボグラフィ ア・ラ・カルト 《その8》小翼羽

⑧小翼羽 (alula)

初列風切最外側羽根のすぐ外側の羽根。種によって数に違いがある(2~7枚)が、多くの種で3枚か4枚。人間の親指にあたるところに縦に重なって付着。小さな羽根だが羽軸も羽弁も頑丈。飛翔速度が落ちた時に、親指を立てるように、この羽根を立て翼縁に隙間を作り、そこを通過して空気が翼の表面を高速で流れることにより揚力が働く。離陸や着陸などの時に使われる重要な羽根。小さい鳥では見るのは困難だが、大形の鳥ではよく見える。

私の経験では、例えば、ノスリが高空で翼を縮めてダイブした後反転上昇する時に、また、チョウゲンボウが停空飛翔する時などに小翼羽を立てます。最もよく見えて分りやすいのはアオサギで、着地寸前に立てるのを正面から観察すると、比較的大きな黒色の羽根が目には焼き付きます。

⑨A スズメ目

羽根の数は3枚。閉翼時でも羽根の外縁部のみ或いはかなり広い範囲で見えます。幼羽根は色が淡いので年齢識別に役立ちます。

⑨B シギ・チドリ類

閉翼時には脇羽根などに覆われて殆ど見えません。幼羽根は褐色味が強いので年齢識別点にはなりますが、あまり役に立ちません。

⑨C カモメ類

シギ・チドリ類と同様、閉翼時には殆ど見えません。幼羽根が遅くまで(春になっても)残り、年齢識別には有用です。

⑨D カモ類

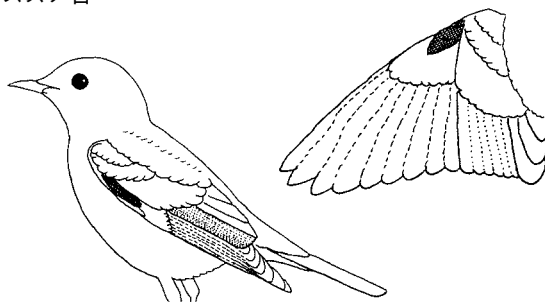
閉翼時には見えません。飛翔時に少し立てるのが観察されます。

⑨E ハト類

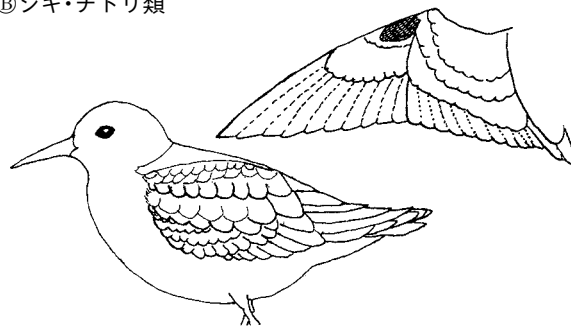
閉翼時にも見えますが、識別には役に立ちません。

★以下、次号に続く

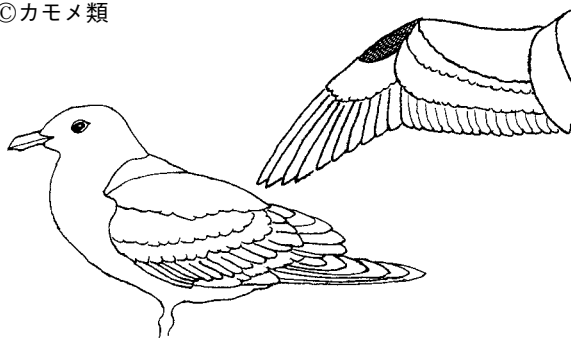
⑨A スズメ目



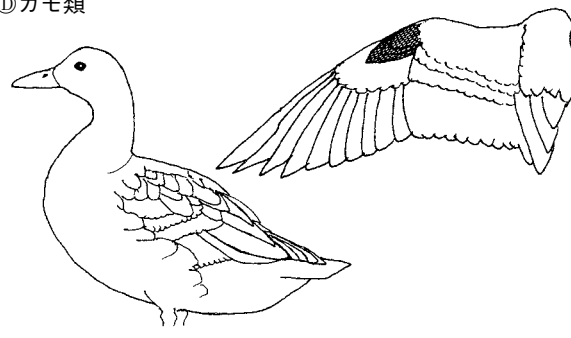
⑨B シギ・チドリ類



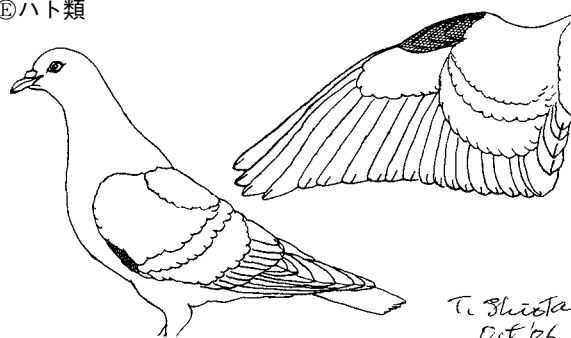
⑨C カモメ類



⑨D カモ類



⑨E ハト類



T. Shiojima
Oct. 06



Chapter 8.9

トボグラフィ
ア・ラ・カルト 《その9》 肩羽

⑨肩羽 (scapulars)

翼の部位ではなく翼の付け根と胴の隙間を覆う羽根。肩甲骨に付着。肩の位置は、翼を畳む時の折り目の角(翼角)と誤認されることがある。翼角は、人間では手首にあたる。

①スズメ目

周辺(背、後頸、雨覆など)と同色のものが大半で、見て取りにくい部位です。エナガのように周辺と異なる色(赤紫色)の鳥は見やすいです。また、翼を閉じたまま持ち上げた時などには、肩羽が少し盛り上がりますので、見て取れます。

②シギ・チドリ類

年齢や換羽を観察するために大変役に立つ部位です。上段に3列、下段に2列あります。秋の渡りで見る幼鳥は、成鳥とは異なった特有の色や模様を持っています。特に分かりやすいのはオバシギ、オジロトウネン、オオソリハシギなどです。また、換羽状態は、頭部や下面より肩羽がずっと分かりやすいです。幼鳥では上段の下列がほぼ全て脱羽してぼやけた白線があるように見えたり、成鳥、幼鳥とも一部が冬羽に換羽していて、周りとは異なった羽根(通常灰色)が生じているなど、換羽の観察に恰好です。

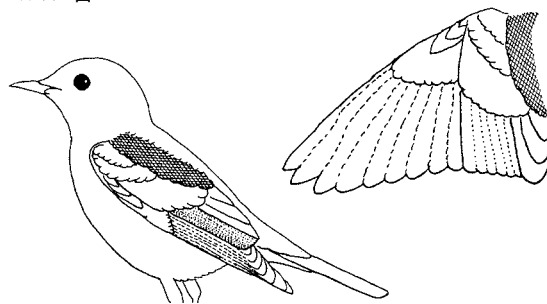
③カモメ類

シギ・チドリ類と同様、換羽の状態が大変見やすく分かりやすい部位です。幼鳥から第1回冬羽に移行する時に、冬羽根が最も見て取りやすいのは、肩羽です。例えば、ウミネコでは、茶褐色の地にやや淡い羽縁のある幼羽根に混じって、夏の終り頃に、灰褐色でバフ色の羽縁のある羽根が生えてきます。年内には肩羽全てがこの羽根に換わります。肩羽が羽縁のない一様の灰色(鱗模様がない)になるのは、その1年後の第2回冬羽です。ウミネコは周年日本で見られますが、ユリカモメの幼鳥は肩羽を一様の淡灰色に換羽を完了した状態(第1回冬羽)で日本に飛来します。日本では、肩羽に褐色の幼羽根を残した個体は極少数、全身幼羽根の個体は稀です。このようなことから、ユリカモメの群を1羽1羽肩羽を確かめてみるのも一興です。

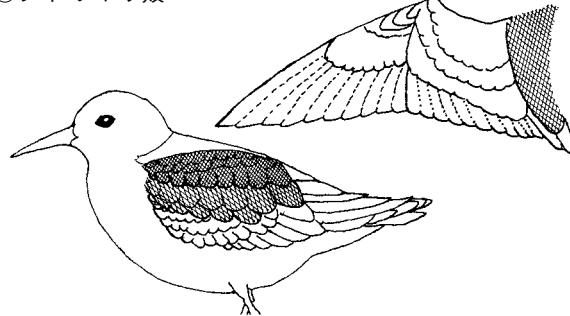
④カモ類

オナガガモ、ハシビロガモ、トモエガモ、シマアジ(全て♂)のように特有の形や色のものがあります。スズガ

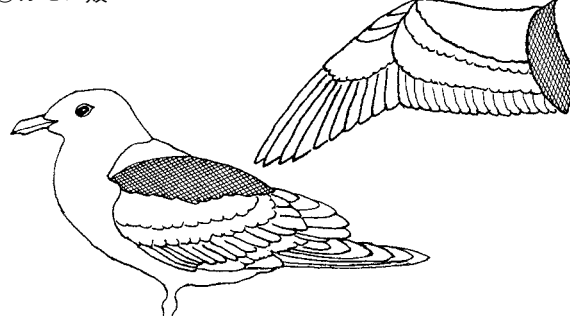
①スズメ目



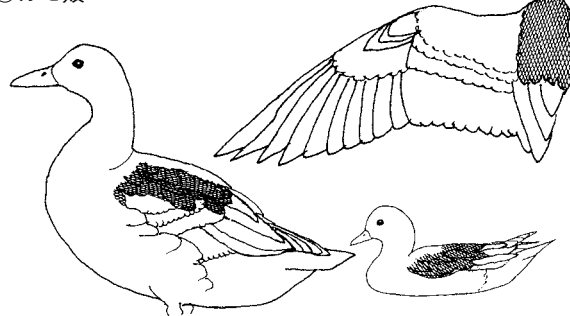
②シギ・チドリ類



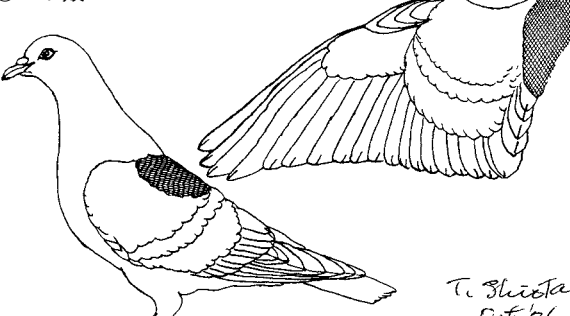
③カモメ類



④カモ類



⑤ハト類



T. Shiojima
Oct. 06



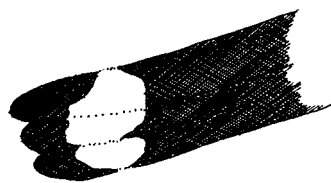
Chapter 9

わかってよかったヨタカの尾

I. 白色横帯

各地に足しげく通われて観察・撮影されている北山弘司さんから頂く写真には、ちょいちょい課題含みのものがあります。図鑑に写真や図それに具体的な解説がない写真です。こんな1枚にヨタカの尾があります。

2006年10月7日に大阪城で撮影されたヨタカは尾の下面が写っています。この写真の尾には、別掲イラストのように、尾の先端近くに両側に届く幅広い帯状の白斑があります。倍率を上げたデジカメで手持ち撮影されたよしで、少しブレがあり、このため羽根の一枚一枚が殆ど見て取れません。しかし、この白斑は左右の羽根の白斑が連なっていることが辛うじてわかります。となると、この白斑があるのは最外側及び外側から2枚目の羽根であると推定されます。尾は閉じると最外側の羽根が一番下になり中央の1対の左右いずれかの羽根が一番上〔尾の上面〕に畳まれます。しかし、私はこれまでヨタカの尾の白斑は野外でも写真でもきっちりと見たことがありません。



ヨタカの尾 (下面白色帯)

北山さんは、図鑑には尾の下面が写っている写真がなく、図鑑の解説がご自分の写真の白帯に該当するのかわかよく分らないとのことでした。私も念のため図鑑を数冊見てみました。(♂成鳥には)「外側尾羽<4枚>、<4対> <数枚>」と図鑑により記載が少し異なります。これだけの記載では、北山さんの写真の白帯を断定するには不十分です、そこで、下記2冊の古い本を見てみました。

①『日本の鳥類とその生態』(山階/1941)

「中央対以外には先端に近き所に幅10~20mmの不定形なる白色横帯を有する、尾羽は10枚にて各羽は幅やや広く……」

②『日本鳥類大図鑑』(清棲/1965)

「中央の1対以外、羽端近くには内外弁にわたって三角形の幅2cm位の白色斑がある」

この他、更に古いイギリスの本(1899, 1927)にも同様の記載がありました。『山階』には尾羽根の数は10枚であること、『清棲』には白色斑は内外両弁にあると明記されています。

調べた結果が私の推定通りで“やれやれ”。入院をはさんで1ヶ月余りでようやく北山さんに返事を書くことができました。

II. 図鑑は記載の充実を!

前記のように、多くのバードウォッチャーが使っている図鑑には「外側4枚(4対)に白斑」と記されています。尾羽根は通例6対で、中央の1対にはよく目立つ模様や色彩がないものが多いため、「4対」と言われると、「あと1対はどう?」とってしまいます。ヨタカのように尾羽根の数が通例でない場合、枚数が記されていると、上記のような疑問は生じません。また、白斑は内外両弁にあることが記されてあれば、観察や写真判定が容易になります。

デジスコ撮影が普及した今日、従来、超望遠レンズでも撮影が困難あるいは不可能に近かった部位のクローズアップが撮れるようになったため、今回のような疑問点のある写真を撮る人が増えてくると思います。撮影技術の進化に伴い、これに対応すべく、これから出版される図鑑はどんどん進化してほしいと思います。(2007/2/7記)



迷鳥に迷想

I. はじめに

2006～2007年の冬季、大阪府下に2種の迷鳥が記録されました。鶴見緑地のメジロガモと大泉緑地のキガシラシトドです。この迷鳥情報に接した時、いつものことながら、この2種がどういう状況で大阪に渡来したのか想い迷いました。どちらも、現在知られている本来の分布地域からすんなりと両緑地にたどり着いたとは、どうも考えにくいのです。私の迷想を以下に記し支部の皆さんのお考えをお伺いしたいと思います。

II. 迷鳥2種

1. メジロガモ

3月中旬になってようやく観察に出かけました。水面に浮かんでいる姿を短時間目にしただけですが、換羽が完了したようです。すっかりきれいな羽衣になっていて、私の最大の関心事である換羽と年齢は見取れませんでした。幸い前年に飛来した時(12月)から3月までの写真を数人の鳥友から頂いたり見せて頂くことが出来ました。特に飛来当初の写真では上下面とも羽根の磨耗がかなりひどく、特に下面(胸・脇・腹)の羽根には縦斑のあるものが少なからずありました。成鳥ならこの時季には繁殖羽への換羽が(はぼ)完了している筈ですが、上記のように磨耗のあるのは未換羽の古い羽根であり縦斑は幼羽根と思われることから、この個体は昨年生まれと推定されます。ただ、虹彩が白色(或は白っぽい)なのは成鳥ではないかと思ひ資料を調べたところ、幼鳥は♂では虹彩は灰褐色だが冬の間は淡い灰色に変わるとのこと。他のカモ(例えばハシビロガモ)の例から考えて、メジロガモも成鳥とほとんど差異のない色になることは十分あり得ると思われれます。このようなことから、この個体は昨年生まれと推定されます。

メジロガモの繁殖地の中心は、大まかに言って黒海やカスピ海の北部沿岸地方で最も東部はモンゴルの西部。越冬地は繁殖地の南部、アフリカ、インドなどで、この他あちこちで迷行記録がありますが、このカモは飼鳥として人気が高く、いろいろな施設で飼育、展示されていて、資料にも(迷行例については)“escapes”(いわゆる「カゴ抜け」)の可能性を指摘しています。私は、分布

域から考えて日本への自力飛来の可能性は低いと推定しています。尚、私は「カゴ抜け」という用語を広い意味で使っています。飼育中のカゴあるいはケージから逃げ出した以外に例えば捕獲後輸送中に逃げ出した或は放棄された等等も考えに入れてあります。また、逃げ出したのは日本とは限りません。

2. キガシラシトド

私が観察に出かけたのは3月下旬です。観察では見取れない細かいところは、頂戴した写真を点検しました。この鳥は、図鑑の解説でも冬羽は成・幼鳥の区別はむずかしいようですが、尾や初列風切羽根の磨耗の度合から、昨年生まれと推定しています。3月に入って頭部に黒色の羽根が生じてきており1Wから1Sに換羽が進んでいました。

その後鳥友から聞いたのですが、この個体を調査に来た環境省の人が「(年齢は)“2W”ではないか」と言っていたとのこと。 “2W”とは「第2回冬羽」のことで生後2度目の冬を過ごしていることになり生まれは2005年です。私にはこれは俄かには信じ難く、以下に私見を述べます。

*環境省の人は：_____

A：「2Wとは生後2度目の冬を過ごしている羽衣(の個体)」という正確な意味で“2W”と言ったのか。

B：年が明けて(今年になって)(生後)2年目を迎えているという意味で言ったのか。

*環境省の人の話を聞いた人が：_____

C：Bの意味を取り違えて“2W”と誤解したのか。

この3通りの事情が考えられます。

私の手許にある資料には、キガシラシトドの他同属の近縁種であるミヤマシトドとノドジロシトド(*Zonotrichia albicollis*)の羽衣と換羽についての記載があり、羽衣については成鳥、幼鳥、1W、1Sが、換羽については秋季は成鳥繁殖後換羽<完全換羽>・幼鳥羽後換羽<部分換羽>・春季は成鳥繁殖前換羽<部分換羽>・第1回繁殖前換羽<部分換羽>が記載されています。ここには2Wや2Sの記載はありません。恐らく1Wや1Sは成鳥冬羽や成鳥夏羽と差異がない(区別が出来ない)ということと解されます。これが小鳥類の通常の羽衣・換羽です。2W(3W)がそれより年長の羽衣と区別できるのは、日本の鳥ではルリビタキなど極少です。

尚、この個体の年齢を何とか確認したいと思ひ、判りやすい尾の換羽の有無を写真で検討してみました。確認出来ませんでした。真冬に尾が換羽中(事故ではなく正常な換羽)なら幼鳥と判断出来ます。成鳥は秋季の完全換羽で年内には換羽は完了している筈です。

さて、この鳥がどのようにして大泉緑地にやって来のか興味のあるところです。分布は、繁殖地がアラスカ北西部・南部、越冬地はアメリカ西部沿岸地方です。群で渡るとのこと。もし自力飛来であったとすると、渡りの途

中に日本列島に迷行したのでしょうか。この鳥は北海道、新潟県(粟島など)、石川県(舳倉島)それに古くは1935年12月に東京都で初記録されています。分布から考えて北海道や日本海沿岸/島への飛来は可能としても、東京や大泉の記録は自力飛来の可能性はかなり低下すると、私は思います。太平洋側に飛来するとしても、大泉よりずっと北方の沿岸に上陸するのではないのでしょうか。渡りの途中や越冬地では灌木を好み共生する鳥の中で最も引っ込み勝ちなこと。一旦上陸すれば、この鳥の生息環境はさほど難しく見付かるとわれ、そこに定着してしまおうです。それが遠距離の大泉まで飛来してくるのはかなり考え難いというのが私の思いです。図鑑ではカゴ抜けの可能性に言及されています。さりとて、この個体に羽衣の乱れや露出部の損傷が見当たらず、カゴ抜けを判断/確定する証拠が見当たりません。捕獲して精査すれば、何らかの手がかりが見付かるかも知れません。

この個体は本来の越冬地から方角が異なる上に群をつくる同種の仲間もないこと等から、アラスカに戻ることは出来ず日本のどこか或はシベリアの東部あたりでこの夏を過ごすことになるのでしょうか。もし生きていれば、来冬大泉に戻って来るかも知れません。その時の為に捕獲して脚輪を装着しておけば個体識別が可能で。そんなことより、出来ることなら、餌がたつぷりある大泉で越冬すれば、この鳥にとっても渡りの危険もなく、無事に生存出来ると思うのですが……。でもやはり渡りの時期が到来して体内のホルモン等が活性化すると本能的に渡ってしまうのでしょうか。尚、図鑑『日本の野鳥590』には「飼い鳥として輸入されており」と記されています。支部の会員でペットショップ等で見られた方は是非『むくどり通信』に発表してほしいと思います。

Ⅲ. 迷鳥の出自

日本ではバードウォッチングはかなり普及していますが、迷鳥がどのような状況で渡来したのかという関心はあまり広まっていないように思います。出自の検証がプロの間でも大変甘いように思います。その点イギリスやヨーロッパでは迷鳥が発見されると、観察によりその

鳥の羽衣・習性などについて正確且つ詳細な記録(フィールド・ノート)を取り、同定に重要な部位を中心に撮影し更に出来る限り捕獲し(亜)種の確認や類似種との識別点を確認する作業がなされます。その折、escapeの可否も当然検証されます。その結果は後日雑誌等に公表され関心のある人の参考に供されます。その後多少日時はかかりますが、特に自力飛来の可能性が高い場合は、飛来時前後の詳細な気象状況や天気図等と共に気象と鳥に詳しい人が(協同で)検証記事を発表することが少なくありません。私はこれまでこのような記事を少なからず目にしてきました。日本でもこのような作業が出来るだけ早くなされることを待ちわびています。その実現にはバードウォッチャーが意識を高め意見や関心を発表することが役に立つのではないのでしょうか。(2007/04/01記)

《追記》キガシラシトド……尾の換羽

私が観察に出かけた日(3/23)から約2週間後(4/5)に撮影された写真を数枚鳥友から頂きました。その写真では尾中央羽根が2枚が本来の40~50%位の長さまで伸びているのが認められます。そこで、3月の写真を改めて点検したところ、3/13の写真で上尾筒とほぼ同じ長さながら外弁が上尾筒より暗色(黒褐色)の羽根が1枚(或はもう1枚)見えるものがあり、ひょっとしたらこれが伸び出した尾羽根なのかも知れません。3/23の写真では少し伸びた新羽根らしいものが見えるものと羽色が一樣の上尾筒しか見えないものがあります。見えないのは他の羽根に覆われているためでしょう。そして、4/5の写真では上記の通り半分位伸びた羽根が2枚見えています。2~3週間で急速に伸び出たようです。尾の換羽は他のシトド(ミヤマ、ノドジロ)では成鳥は中央羽根1対を春季に換羽することがあり、幼鳥では秋~冬季に換羽することがあると資料に記載されています。キガシラシトドについては、詳細な記載のある資料が私の手許になく不明ですが、同属近縁種であることから同様の換羽があると考えられます。この個体が今後どの様な換羽をするか大変興味があります。(2007/04/09記)



I. はじめに

2007年1月宮崎県の養鶏場で鳥インフルエンザが発生しました。感染原因は鑑定の結果、2005年に中国西部の青海湖で発生しインドガンやオオズグロカモメ等を大量死させたものと同型のウイルスであることが判明し、テレビや新聞で「中国大陸方面から(カモなどの)渡り鳥に運ばれたウイルスが原因である見方が強められた」と報道されました。あるTV報道番組は1月下旬に、鳥の模型を2ヶ画面の地図上を、青海湖から東に移動させ、前月に同型ウイルスのインフルエンザが発生した韓国を経由して宮崎県に、あたかも渡り鳥が青海湖から飛来したように解説していました。発生地点を線で繋いで理解しやすくするために(?)画面を単純化して放映したのでしょうか。しかし、この画像は視聴者に理解どころか大いなる誤解を与え兼ねません。『この冬カモが遙か西方の青海湖から東に飛び宮崎県にやって来た』とってしまう人が少なくないと思います。これはかなりの高い確率で誤解ではないでしょうか。これに先立ち、ある全国紙では社説で渡り鳥がウイルスを日本に運んできた可能性を述べていました。

感染源として渡り鳥説を唱えているのは、大学教授であれ研究者であれいずれも微生物学やウイルス学の専門家です。私にはこのような人はどうも鳥(の渡り)については素人のように思えてなりません。マスコミは独自の取材や検証をせず、このような“素人の専門家”の意見を“そのまんま”報道しているのでしょうか。

II. 感染源の特定

「(カモなどの)渡り鳥」と言うならどの鳥なのか、つまり種の特特定あるいは少なくとも2~3種に絞り込むことが肝要です。さもないと、極論すれば、全てのカモ或は渡り鳥が対象になり兼ねず、感染源の解明がぼやけたり究明に長日時がかかったり、さらに、他国にあったように(後記)感染源でない鳥まで駆除しようという議論に繋がったりします。

そもそも青海湖から日本に越冬にやって来る「(カモなどの)渡り鳥」としてどんな鳥がどのくらいの数いるのでしょうか。私は皆無に近い程少ないと思っています。

確かに、青海湖で大量死したインドガンやオオズグロカモメそれにチャガシラカモメやアカツクシガモなどは日本にも記録があります。しかし、これらの鳥はごく稀な迷行例のみと言っていい鳥です。アカツクシガモは記録はやや多いですが日本にずっと近い所にも繁殖地があり中にはカゴ抜けの可能性もある鳥です。ある専門家は「これら(上記)の鳥が直接来なくても日本を訪れる渡り鳥に感染させる可能性はあり……」と言っています。これは殆んど空想の世界ではありませんか。青海湖で繁殖するインドガン、オオズグロカモメ、チャガシラカモメ等は東方ではなく南方(インドやミャンマー等)で越冬します。他方日本に越冬にやって来る「(カモなどの)渡り鳥」は繁殖期には概ね日本より北東方面のシベリアに居り、青海湖の鳥とは接触の可能性は殆んどないと考えるのが妥当です。

感染源の鳥種を特定するには、例えば、それがカモ類の可能性が高いと言うなら、養鶏場の近く(地上)に飛来して採餌するであろうカモを先ず調べてはどうでしょうか。幸い日本には『全国ガンカモ科鳥類生息調査』が毎年1月に実施されその結果を環境省が公表しており、各県はその集計を保有しています。それを感染源の割り出しに活用すべきであり、必要に応じて調査員の協力を仰げばよいのではないのでしょうか。

感染源として渡り鳥(つまり野鳥)を疑う以外にすべきことがあります。国連食糧農業機関(FAO)は「インフルエンザは野鳥がもたらすこともあり得るが、現にインフルエンザを拡散しているのは家禽生産、不適切な衛生、統制のない商業主義等の人的活動であり、的確なリスク査定を実施する為には、鳥の渡りや色々な種の鳥について感染の可能性をきっちり理解出来るよう更なる調査が必要である」と言っています。2006年に東欧やアフリカ等でも鳥インフルエンザが発生しましたが、感染源は中国やトルコから不法に輸入された家禽(食肉用)やひよこが強く疑われています。さらに、クロアチアやルーマニア等では鶏糞が養魚池や農地で利用されておりそこで死んだコブハクチョウは鶏糞が感染源ではないかと考えられています。2007年2月にイギリス南東部サフォーク州の飼育場で2,600羽の七面鳥がH5N1ウイルスで死んだとの新聞報道があり、早速、同州でカモ類を飼育し交雑を研究している人(長年のペンフレンド)に問い合わせたところ、七面鳥はハンガリーから輸入されたものとのこと。結局1週間以内に159,000羽が処分され、被害はそれで収束した模様です。これらの他ペットとしての飼育鳥の輸出入も感染の要因のひとつとして注意する必要があります。尚、インドガンは青海省では肉用・卵用として家禽と一緒に飼育されているとのことで、青海湖での大量死はこれが感染源の可能性もあります。また、理

不尽にも野鳥が疑われた国や地域では、例えばタイでは世界的に貴重な集団繁殖地があるスキハシコウの駆除が画策されたり、東欧ではツバメの巣を壊したりした国もあったようです。

このように感染源は「渡り鳥」だけではなくそれ以外の要因も十分あり得るのです。「渡り鳥」を安易なスケープゴートに使うと真の感染源を見失う恐れがあり、これは危険です。

尚、私が知りたくて報道されていないことがあります。宮崎県はの2006年2月現在、鶏の飼養数が1,843万7千羽で全国1位とのことです。この鶏はどこで孵化したひよこから育ったのでしょうか。まさか青海省から輸入したのではないでしょうね？

Ⅲ. バードウォッチャーの役割

宮崎県では鶏舎には防鳥ネットが張られていて野鳥は入れないようです。小さな窓なら開いていても、カモ類は侵入でさないでしょうが小鳥類やカラスやドバトは入る可能性はあります。ですから、カモ類の他小鳥類やド

バト等も調査・検査の対象にすべきでしょう。

その後、専門家は「渡り鳥によって運ばれたウイルスがネズミ等の小動物によって鶏舎に持ち込まれた可能性がある」とも言っています。

マスコミ報道を見ていてひとつ物足りなさを感じるのは、鳥(の渡り)の専門家の意見が出て来ないことです。ネット上では多様な情報が出ているようですが、やはりTVや新聞の方が、目にする国民はずっと多いと思います。鳥の専門家が出てこないなら、我々バードウォッチャーが出るほかありません。こんな思いから、私は宮崎県と周辺2県(大分、鹿児島)の2005年と2006年の主なカモ9種の羽数の一覧表を作り上記の私見と共にTV報道番組宛に2度ファックスしました。予想通り何ら反応はありません。

このようなことを、長年かかりつけの医者に話したところ、宮崎県知事にファックスしてやれと言われました。鳥インフルエンザがまたどこかの府県で発生すれば、報道をよく見て知事宛にファックスしてみようかと思っています。皆さんいかがお思いでしょうか。

(2007/04/05記)



I. はじめに

オオカワラヒワについて、岡本支部長がいろいろな個体の写真と共に『むくどり通信』(No.183) に報告されています。西宮市ではオオカワラヒワの特徴を持った個体が多いとのこと。掲載に先立ち頂いた写真を現行の識別点に照らしてみても、やはりオオカワラヒワだと思いました。その後しばらくして、亜種や変異個体などにも大きな関心を持ちいい写真を撮っている鳥友から、枚方市で撮影されたオオカワラヒワ(?) の写真と共に識別ポイントについておたずねの手紙を頂きました。同友によりますと、ご自分の観察では「三列風切の白色部が目立つ個体の方が多いような気がする」「微妙な個体もある」とのことです。そこで、長年やろうと思いつながらおざりになっていて観察も不十分なオオカワラヒワについて、あらためて資料をよく調べることにしました。

II. カワラヒワの亜種 (後掲亜種別繁殖分布図参照)

現在、カワラヒワ(という種) は下記の6亜種に分類されています。そのうち日本にはオオカワラヒワ、コカワラヒワ、オガサワラカワラヒワの3亜種が記録されています。

①オオカワラヒワ (*Carduelis sinica kawarahiba*)

②コカワラヒワ (*C. s. minor*)

〈注〉『日本鳥類目録』(日本鳥学会/2000) ではこの亜種は種名と同じカワラヒワとなっていますが、本稿ではオオカワラヒワと対比するため旧和名のコカワラヒワとします。『日本の野鳥』(叶内/1998) ではコカワラヒワとしています。

③オガサワラカワラヒワ (*C. s. kittlitzii*)

④ウスリーカワラヒワ (*C. s. ussuriensis*)

〔分布〕中国東北地方東部、朝鮮半島、ウスリー地方など
〔特徴〕他の全ての亜種より全体的に淡色。大きさはオオカワラヒワよりやや小さい。

〈注〉『日本鳥類大図鑑』(清棲/1965) ではチョウセンカワラヒワという和名が、また、『ウスリーの鳥』(カ・ア・ヴォロビョフ/1954、高橋清訳/1978) ではこの他にウスリーカワラヒワも使われており、私はこの方が適切と思います。

⑤ホクマンカワラヒワ (*C. s. chabarovi*)

〔分布〕中国東北地方北部

〔特徴〕*ussuriensis* に似るが頭頂及び背がやや暗色。

⑥ペキンカワラヒワ (*C. s. sinica*)

〔分布〕中国東北地方南部から中国東南部及び西南部

〔特徴〕小型でコカワラヒワに似るが額、目先、耳羽などが濃いオリーブ色で上面は濃赤茶褐色に富む

〈注〉⑤⑥の和名は(清棲/1965) による。

III. オオカワラヒワ(成鳥♂) の識別点 (現行)

図鑑に書かれている主な識別点は(コカワラヒワと比べると) 概ね下記の3点です。

①ひと回り大きい

②三列風切外弁の白色部が幅広く(比較的目立つ) 傾向にある

③頭から後頸にかけて(コカワラヒワの灰黒色より淡く) 灰色

IV. 図鑑掲載写真の点検

ここで、下記4種の図鑑に出ているオオカワラヒワ成鳥♂の写真を点検し今後の観察の参考としたいと思います。

①『日本の野鳥』(叶内/1998 山と溪谷社) P.558

写真①では頭頂の灰色がやや濃色で後頸は見えず、三列風切の白色部も詳細が見えず、私にはオオカワラヒワかどうか判断できません。写真が少し暗いのかも知れません。著者は大きさを識別の主なポイントとして判定したのでしょうか。写真②は撮影が2月なので冬羽と考えていいと思います。この写真は大きさを聞かされなくてもオオカワラヒワと判断できます。著者は当然大きさを観察した上での判定でしょう。上面(背、肩など)の羽色が資料(後記)のオオカワラヒワにほぼ合っています。

②『日本の野鳥590』(大西/2000 平凡社) P.574

5月の個体ゆえ夏羽と考えるべきでしょう(〈注〉春は換羽せず羽根の磨耗で羽色に変化)。頭から後頸の羽色がやや濃色ですが、三列風切は磨耗がひどいにも拘わらず幅広いことから、オオカワラヒワと考えられますが、大きさが分らないと判断に迷います。撮影者は大きさを確認していると思います。この個体が真冬の撮影なら判断はずっと容易でしょう。尚、同ページの同じ5月のコカワラヒワの写真と比較すると上記の部位の差異がよく解ります。

③『日本の鳥550』(五百沢/2000 文一総合出版) P.282

5月の写真であり羽根がはげしく磨耗しています。頭頸部の灰色がかなり暗色ですが、これは撮影状況によるものかも知れません。撮影者は大きさも確認してオオカワラヒワと判定したのでしょうか。尚、同ページのコカワラヒワ(3月)の写真では三列風切の白色部がかなり幅広

いためオオカワラヒワと考えたくなりますが、このような個体に出会った時は、何とかして大きさの確認がしたいですね。

④『北海道野鳥図鑑』(河井他/2003 亜瑠西社) P.186

写真①は8月ですが、三列風切がひどく磨耗しているにも拘わらず白色部が幅広いことがオオカワラヒワ的です。それ以外の羽色はオオカワラヒワ的ではありません。キャプションに(?)が付されているのは、この羽色に因るものなのか、季節(真夏)が北から渡って来るとしては早過ぎるとの判断なのでしょう。大きさの確認はされているのでしょうか。写真④(4月)はキャプションに性別がありませんが、♀なのでしょう。尚、写真②③には亜種名の記載がありません。撮影者が、例えば大きさの確認ができなかったならば、その理由で、(?)付きの判定をすればよいのではないのでしょうか。

V.資料調査

詳しい記載による識別点を期待して、手許の内外の資料をいろいろ調べてみましたが、オオカワラヒワ/コカワラヒワ両亜種の特徴を具体的に対比して詳記したものはありませんでした。記載が不統一な点や誤記が疑われるような箇所も目につきました。しかし、現行の識別点の確認出来たり、新たに参考になることも少しありました。以下それらを略記し今後の観察のポイントとしたいと思います。

①大きさ

私の観察経験は限られたものですが、最も確信が持てるポイントは大きさです。資料では、オオカワラヒワは「コカワラヒワより明瞭に大きく、最大の亜種」(『旧北区の鳥』Vaurie/1959)、コカワラヒワよりはるかに大形(清棲/1965)などと明記されています。測定値(翼長・尾長・嘴峰・跗蹠)はの10%強の差があります。比較する他の個体がない場合の観察では、大きさが分り難いことは確かです。でも、鳥は、見慣れてくると(習慣で)、“いつも見ているのよりちょっと大きそう”程度の大きさは感じられるものです。1羽のみ或は同じ大きさの個体の小群などを観察した時は、“大きさの感じ”は記録しておきたいものです。客観的な証拠にはならなくても後々役に立つと思います。当該個体の視野の外でも、近くにいる別の個体や別の種の鳥とでも比較するのも一法です。

②上面の羽色

背、肩の羽色については、両亜種とも(暗)褐色ですが色調に微妙な差があり、オオカワラヒワは赤茶色味があり(外国の資料には「チョコレート褐色」と記したもののがある)、コカワラヒワはオリーブ(緑黄)色味が強いことです。『鳥類原色大図鑑』(黒田長禮/1933)にはこの色調の差を彩色した図が出ています。

③羽色の季節変化

多くの種では春季の部分換羽により羽色が変わりますが、カワラヒワ(種)では春季は換羽せず体羽は磨耗して褐色味が減少(消失)し黄色味が増し、特に顔及び胸は(羽色の変化が)著しく、喉は黄緑色を帯びてきます。これは両亜種ともに生じます。実際の観察でも春から夏は黄色味が強くなることは多くのバードウォッチャーが気付いています。これは、見方を変えますと、春から夏の個体は両亜種の羽色が似ることになり、その意味で識別がより難しくなります。従って春以降は大きさがより重要になります。加えて、三列風切の外弁も磨耗がはげしく白色部が狭くなり判別しづらくなります。尚、私見ですが、三列風切の外弁の白色部が幅広い場合、各羽根の先端部では白色が内弁までかなり深く及んでいます(後掲図参照)。磨耗がひどい状態でもこの内弁の白色が残っている個体はオオカワラヒワの可能性が高いかもしれません。

VI.もうひとつの亜種

前記のように日本には3亜種が記録されています。ところが、『590』に「オオカワラヒワよりやや大型の固体群も渡来している」と記されています。オオカワラヒワが最大の亜種と古くから認められているのに、それより大型の、しかも単独個体ではなく個体群がいるとなると、首を傾げたくります。著者に問い合わせたところ、上記の説はある大学の研究者が学会で口頭発表したとのこと。この発表内容が正しいとすると、「やや大型の個体群」こそがオオカワラヒワであり、それよりやや小型と考えられるのはオオカワラヒワとコカワラヒワの中間の大きさの亜種ということになります。そこで、私が考えるのは *ussuriensis* です。旧い資料には1941/3に島根県で記録されたと記されています。この亜種はウスリー地方では夏鳥で一部が南沿海地方で越冬する由。日本への飛来は十分考えられます。「他の全ての亜種とは♀とも著しく淡色なることにより容易に区別することが出来る」(『日本の鳥類とその生態』山階/1934)とのことなので、見つけたくなります。

VII.識別点のまとめと今後の観察

1.まとめ

A.冬季

①大きさ

オオカワラヒワ > ウスリーカワラヒワ > コカワラヒワ

②羽色 (注) 全体に淡色の個体は特に注目に値する。

a) 頭頸部の灰色の濃さ

灰黒色：コカワラヒワ

灰色：オオカワラヒワ

淡灰色：ウスリーカワラヒワ

b) 上面の羽色

オリーブ（緑黄）色味が強い：コカワラヒワ
チョコレート色味がある：オオカワラヒワ
薄い灰褐色：ウスリーカワラヒワ

c) 三列風切

- ・白色部が幅が非常に広いのはオオカワラヒワの可能性
- ・コカワラヒワでも、特に換羽後の新羽根では、広い個体もあり、観察時にいろいろな個体を比較する要あり。先端部の内弁にも留意。
- ・ウスリーカワラヒワも白色部はかなり幅広いが「羽根の先端には灰色はない」（『ソ連邦の鳥』）とのこと。

B.春季

コカワラヒワ、オオカワラヒワとも春先から体羽に黄色味が目立つようになります。ウスリーカワラヒワも同様と思われます。季節が進むと羽根の磨耗も進み三列風切の白色部も幅が狭くなり、総じて識別は冬季よりやっかいです。従って春季以降は大きさが重要なポイントとなります。

2.これからの観察

カワラヒワは普通種ですが、亜種を意識すると観察に深みが出てきて面白さが倍加します。本稿で紹介した識別点は極めて大まかで暫定的なものです。多くのバード

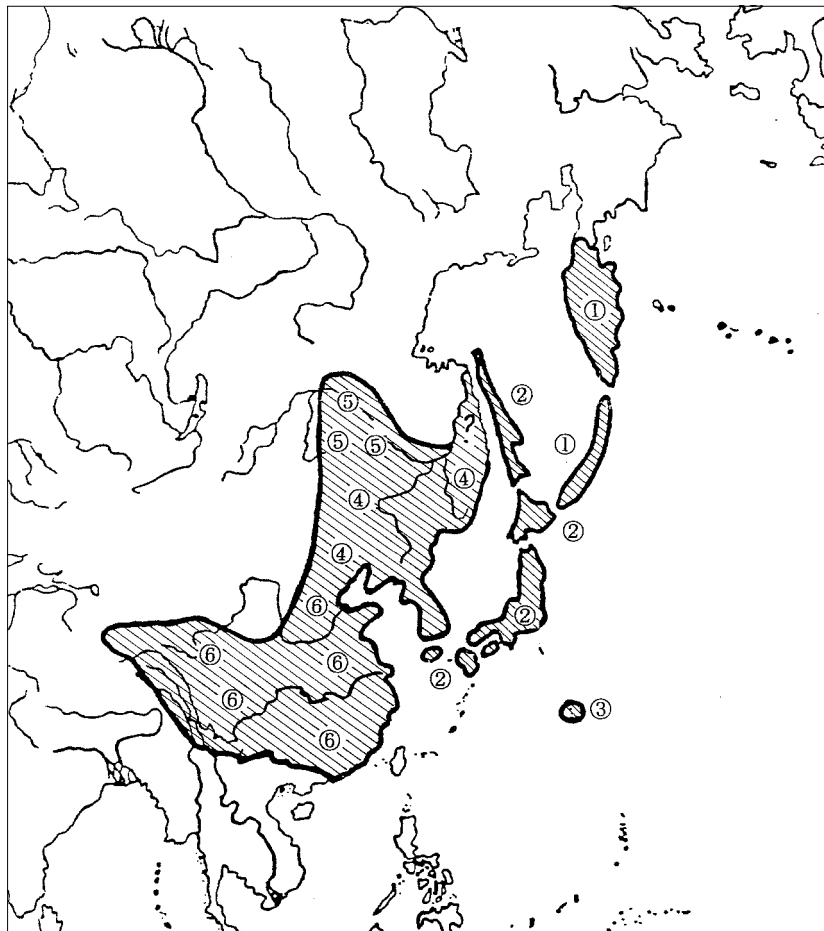
ウォッチャーが少しでも詳しく観察し、また、撮影した写真を分析することによって、いろいろなことが判ってくるに違いありません。

本稿の対象は成鳥♂のみです。♀は概ね♂より淡色で、翼と尾の黄色部が♂ほど鮮明ではなく小範囲です。また、コカワラヒワでは幼鳥は「8月末より換羽に入り全身を換羽して第1回冬羽となる。この羽衣は成鳥と全く向様である」（山階/1934）とのこと。他の亜種も恐らくほぼ同様だと推測されます。

本稿を書くに当たっていろいろな図鑑の写真を見ました。キャプションではカワラヒワとなっていたり、オオカワラヒワ或は別の亜種ではないかと思われるものもありました。

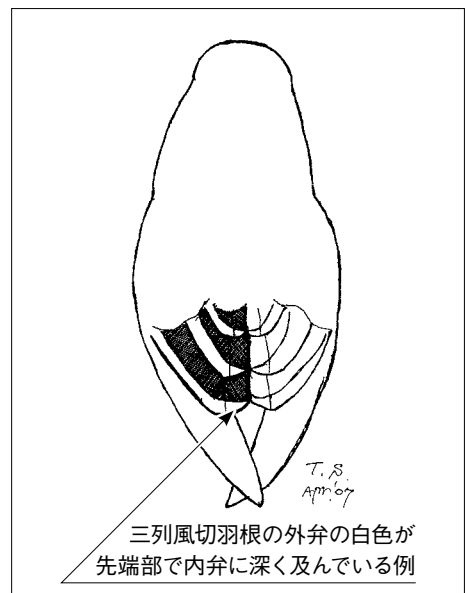
高野伸二さんはオオカワラヒワについて夙に、『野鳥識別ハンドブック』（1980/日本野鳥の会）に「秋に多数本州以南にも渡来し、群で生活している。庭の餌台に来る場合など、近距離ではコカワラヒワと見分けられる」と記されています。今もこの状況は変わらないのではないのでしょうか。オオカワラヒワは、思いのほか身近に数多くいるにちがひありません。私自身詳しく観察してこなかったのが少々悔やまれます。遅ればせながら、これから先出来る限りよく観察しようと思っています。

(2007/04/22記)



■カワラヒワ亜種別繁殖分布図
（『ソ連邦の鳥』 Dement'ev/1954を一部改作）

- ①オオカワラヒワ
(*Carduelis sinica kawarahiba*)
- ②コカワラヒワ (*C. s. minor*)
- ③オガサワラカワラヒワ (*C. s. kittlitzii*)
- ④ウスリーカワラヒワ (*C. s. ussuriensis*)
- ⑤ホクマンカワラヒワ (*C. s. chabarovii*)
- ⑥ペキンカワラヒワ (*C. s. sinica*)



三列風切羽根の外弁の白色が先端部で内弁に深く及んでいる例